

※ キリスト教を基盤とする統合

キリスト教はヨーロッパにおける諸民族や国・地域が連携する要因ないし基盤になった。例えば、11世紀末から13世紀後半にかけて、西ヨーロッパ諸国は聖地エルサレムを奪還するため、**十字軍**を編成している（十字軍について、417頁参照）。その後もイスラム勢力に対抗するため（451頁参照）、または、ヨーロッパ諸国間の戦争を回避するため（585頁参照）、**神聖同盟**が結成された。

現在でもキリスト教はヨーロッパの政治・社会や諸民族に大きな影響を与えているが、地域統合に宗教的要素を加えることは支持されていない。これは政教分離の原則に反するためである。EU統合からも宗教的要素は排除されおり、欧州連合は「キリスト教クラブ」ではない（123頁参照）。

第3節 EU統合（欧州統合）が始まるまでの歴史

現在、ヨーロッパの国々は様々な分野で緊密に連携している。その中でも、とりわけ高度に発展しているのがEU統合であり、EUはヨーロッパと同一視されることも少なくない（16頁参照）。

この地域統合が始まったのは第2次世界大戦後であるが、古代から培われてきた諸国に共通の文化や価値観が緊密な政策協力を可能にしており、EU統合の基盤は短期間の内に生成されたのではない。共通の文化や価値観の生成に大きく貢献したのは2000年前のローマ人であり¹⁵⁵⁰、イタリア半島中部で発祥したこの国は武力で地中海世界を支配すると、大規模な経済圏や文化圏を誕生させた。

なお、統合とは国家が独立を維持した状態で提携することであり、国々がまとまって一つの国を建設することではない。古代ローマは新たに獲得した領土を属州として組み入れ、広大な帝国を築いたため、地域統合を行ったわけではないが、それを通しヨーロッパ諸国に共通の歴史や文化が生まれ、現在の欧州統合の基盤が形成された。フランク王国も同様である。第2次世界大戦後のヨーロッパ統合には、フランク王国が解体され、その領土内に成立した国々が再統合を実現する意味合いが含まれている（571頁参照）。

11世紀末に始まった十字軍の遠征期、キリスト教国としての一体性が生まれたが、15世紀に入ると、「トルコの脅威」に備えるため、キリスト教国が対等な関係で結束する連合構想が提唱されるようになる。17世紀には諸国間の関係について定める法（国際法）が制定されるとともに、外交による和平構築の理念が発展した。19世紀に入ると、国際機関が創設される。第2次世界大戦後に発足したEUは、この延長線上にあり、20世紀、ヨーロッパは2度の世界大戦の舞台になったことを踏まえ、和平構築の重要性がそれまで以上に強く認識されることになった。

EU統合を欧州統合と呼び、その他のヨーロッパ諸国間の連携とは区別されているが（16頁の注56参照）、統合の礎は長い歴史の中で形成されてきた。本節では、その概要について説明する。

なお、諸国間の連携は西ヨーロッパで発展しており、文献もこの地域に関するものが多い。本節でも西欧に重点を置くが、統合は東欧でも行われている。とりわけ多くの国が隣接するバルカン半島では種々の試みが繰り返されてきた。

【参考】南東欧（バルカン半島）における統合

14世紀後半から19世紀後半にかけて、バルカン半島の大半はオスマン帝国に占領されていた。イスラム体制からの解放を目指し、諸国ないし諸民族は連携したが、独立運動は制圧されることが多かった¹⁵⁵¹。

19世紀に入り、民族主義が高まると、この半島におけるスラブ人の結束も強化された。また、「汎スラブ主義」が隆盛し、西スラブ人であるロシア人も介入するようになる（372頁参照）。この世紀の中頃（1861

¹⁵⁵⁰ 統合の歴史は古く、古代ギリシアの時代、つまり、西洋史の初期の段階で見られる（313頁の注1020参照）。ただし、それに参加したのは専ら南東欧の都市国家であり、部分的には小アジアにも及んでいた。一地方に限定されない、欧州の広い範囲での統合は古代ローマの勢力拡大とともに始まる。

¹⁵⁵¹ なお、バルカン半島の統合と同半島における地域統合とは異なる。前者は、主に、スラブ国家を建設する試みを指し、例えば、18世紀後半、ロシアのエカチェリーナ2世は半島をオスマン帝国から解放し、自身の息子を皇帝

年)、イタリア人が達成した国家統一はスラブ人を刺激することになり、1865 年以降、セルビア公のオブレンヴィッチ (Obrenovich) はルーマニア、モンテネグロ、ブルガリア、ギリシアと個別に協定を締結し、4ヶ国からなる同盟を作り上げた。しかし、彼が1868年に暗殺されると、諸国の連携は一夜にして失われることになる。また、ギリシアがスラブ人の勢力拡大を警戒し、離反した¹⁵⁵²。

なお、1878年、バルカン諸国の大半は独立を達成するが、その後、諸国は結束する一方で、互いに争うようにもなる。

1908年、青年トルコがオスマン帝国で革命が起こし、政権を奪取した。これにより、帝国が再び力をつけることを恐れたセルビア、モンテネグロ、ブルガリア、ギリシアは、1912年、個別に安全保障条約を締結することで、**バルカン同盟** (Balkan League/Balkanbund) を成立させた。同年、オスマン帝国に戦争 (第1次バルカン戦争) をしかけ、勝利を収めたが、翌年 (1913年)、オスマン帝国から奪ったマケドニアの領有をめぐるブルガリアが諸国と対立し、同盟は崩壊した (380頁参照)。諸民族が対立していた当時の状況は「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれ、第1次世界大戦の舞台になる。

第2次世界大戦後、ユーゴスラビアの指導者ティトーはブルガリアのディミトロフ首相と共にバルカン連邦構想を立ち上げ、バルカン諸国の統合を目指したが、スターリンの反発にあい、実現しなかった¹⁵⁵³。

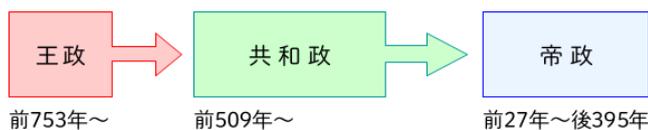
冷戦終結後、バルカン諸国の対立は激化したが、近年は様々な統合が進められており、1997年には**バルカン・サミット**が発足した。また、EU、欧州評議会、国連、NATO等、外部からそれを支援する体制も構築されている (96頁参照)。

※ 北欧諸国の統合について、83頁を参照されたい。

1. 古代ローマによるヨーロッパ支配

伝説によると、ローマは紀元前753年、古代ギリシアの英雄の血をひくロムルスによって建設された (319頁参照)。初期のローマは王によって治められていたため、**王政ローマ**と呼ばれているが、前509年、市民が王を追放し、国体は**共和政**に変わった。前27年、さらに**帝政**になると、一般に「ローマ帝国」と呼ばれている国が出現するが、実際には“*Senātus Populusque Rōmānus*” (SPQO) という国号が使用されていた。これは「ローマの元老院と人民」という意であり、「帝国」に相当する語は含まれていない。王政、共和政、帝政というこれらの異なる政治体制からなるローマを包括し、**古代ローマ** (Ancient Rome) と呼ぶ (318頁参照)。

古代ローマの政体



とする帝国の創設を目指した。なお、当時のロシアは、1774年の露土戦争で勝利を挙げ、クリミア半島を併合したが、バルカン半島まで進出することはできなかった (425頁参照)。

同時期、ギリシアの詩人リガス・フェレオス (Rigas Feraios) は「汎バルカン連邦」 (pan-Balkan Federation) の結成を目指し活動したが、オスマン帝国によって処刑され、構想は実現しなかった。19~20世紀には社会主義者によるバルカン連邦の創設が活性化した。See Vangelis Koutalis, *Internationalism as an Alternative Political Strategy in the Modern History of Balkans*, Organization of Communist Internationalists of Greece-Spartacus, 2003. 20世紀における南スラブ人の国家統一 (ユーゴスラビアの建設) について、538頁を参照されたい。

¹⁵⁵² L. S. Stavrianos, *The Balkans Since 1453*, in <https://web.archive.org/web/20090211014823/http://www.suc.org/culture/history/berlin78/>

¹⁵⁵³ Georgi Dimitrov, *The Significance of the Second Balkan Conference*, in <https://www.marxists.org/reference/archive/dimitrov/works/1915/balkan.htm>

なお、第2次世界大戦後、スターリンはバルカン同盟の結成を阻止し、南スラブ人の統合を目指したユーゴスラビアのティトーを東側陣営から閉め出した。

◎ 巨大な植民地帝国への発展

王政期のローマはイタリア半島中西部（現在のローマ市）に建設された小さな都市国家に過ぎなかったが、共和政中頃（前 270 年頃）に半島全域を制圧すると、海外に進出した。シチリア島の西部を支配していたフェニキア人を倒し、地中海上の覇権を手に入れると（24 頁参照）、ヒスパニア（イベリア半島）やアフリカ北部を制圧し、領土に加えていった。

前 2 世紀にはマケドニアやギリシアの紛争に介入しながら両者を屈服させ、「属州」とする。さらに、小アジア、シリア、パレスチナを領土に加え、奴隷や物資の供給源とした。

なお、ローマがイタリア半島外で獲得した“provincia”は「属州」と訳されているが、このラテン語は権限や職務範囲を意味し、「隷属的な」ニュアンスを持っているわけではない。それを語源とする英語や仏語の“province”は「州」や「県」という意で用いられている（65 頁の注 200 参照）。もっとも、属州は奴隷や穀物の供給地であり、ローマの繁栄のために厳しく搾取されていたことに変わりない¹⁵⁵⁴。

前 1 世紀中頃、カエサルはケルト人の居住地であるガリア（現在のフランスやベルギーの領土、320 頁参照）の平定に成功する。この遠征中、彼は海を越えてグレートブリテン島に侵入しているが、ブリトン人の抵抗にあい、攻略できなかった。ローマがこの島の中南部を領土に加えたのは、それから約 100 年が経過した 1 世紀半ばである（499 頁参照）。

前 1 世紀中頃、ガリアを制したローマは、ライン川を越えてゲルマニア（現ドイツ地方）全域の支配を狙ったが、ゲルマン人の反撃にあい、撤退した（433 頁参照）。14 年、初代皇帝のアウグストゥスが亡くなると、ローマはライン川の右岸を放棄し、左岸に植民地を築いて先進のローマ文化を広めた（65、433 頁参照）。このように、ヨーロッパの西部ではライン川がローマの国境になる。他方、東部ではドナウ川が国境と目されていたが、2 世紀初め、その北岸に住むダキア人（トラキア人の部族）が侵入してきた。トラヤヌス帝はこの部族を倒すために遠征し、現ルーマニア地方を制すと、属州ダキアを建設した。



トラヤヌス帝死亡時のローマ帝国の版図（117 年）¹⁵⁵⁵

¹⁵⁵⁴ Raimund Schulz, Die Möglichkeiten der Statthalter zur Ausbeutung der Provinzen, in Wolfgang Blösel and Karl-Joachim Hölkeskamp eds., Von der 'militia equestris' zur 'militia urbana'. Prominenzrollen und Karrierefelder im antiken Rom, pp. 93-109.

¹⁵⁵⁵ 出典：https://commons.wikimedia.org/wiki/File:RomanEmpire_117_de.svg

ローマ帝国の版図はトラヤヌス帝（在位 98～117 年）の時代に最も広がった。これは彼の時代に植民地の範囲が最も広がったことを意味するが、ローマが達成したのは欧州全域の統制ではなく、地中海世界の支配である¹⁵⁵⁶。現在のドイツ領の大半、ポーランド、ウクライナ、ロシア等はその領域に含まれていない。しかし、後世、つまり、帝国の崩壊後、ローマは宗教、文化、法律といった種々の分野でほとんどのヨーロッパ諸国を「支配」することになる（後述参照）。

なお、ローマ帝国の面積は約 440 万 km² であり、大英帝国、ロシア帝国、フランス帝国、スペイン帝国、ポルトガル帝国には及ばない¹⁵⁵⁷。現在のロシアも一国のみでローマ帝国の 4 倍の広さを誇る。

1) 広大な経済圏の成立

帝国の最盛期、その領土内には最大 7500 万の人々が住んでいたと推測される¹⁵⁵⁸。帝国領のほとんどはイタリア半島の外に位置する属州¹⁵⁵⁹で、皇帝が任命する総督（知事）によって治められていた。なお、ラテン語が共通語に指定されたが、帝国は各地域の慣習・文化を尊重し、宗教にも寛容であった。また、属州出身の者にもローマ市民の資格を与えており、その中には皇帝の地位に上り詰める者もいた（484 頁参照）。

属州はローマの発展を支える食糧・物資や奴隷の供給源であり、交易を活性化させるため、道路網、宿駅制度、港湾施設が整備された。また、経済活動を支える法律が制定され（ローマ法について、141 頁参照）、ローマは地中海を囲む巨大な経済圏になる。まさに皇帝という共通の君主の下で、諸地域の多様性を尊重した経済統合が行われた。帝国外の地域との貿易だけでなく、帝国内の取引にも関税が課されていたが、それが通商の妨げになっていたかどうかは分かっていない¹⁵⁶⁰。

なお、人々の移動には通行料が課されていた¹⁵⁶¹。

◎ ローマ人のアイデンティティ

古代ローマでは、初期の時代から他の民族との混血が行われていた¹⁵⁶²。彼らが領土を拡大していくと、その傾向は顕著になり、血統や言語ではなく、ローマ市民権や文化、個人の意志が重視されるようになる。紀元前 1 世紀前半、キケロはアテネに代表される民族国家を冷笑し、「雑種国家」（mongrel nation）としてのローマの性質を賞賛している¹⁵⁶³。ある歴史家によると、ローマ人のアイデンティティは動的かつフレキシブルで、不変ではなかった¹⁵⁶⁴。

なお、古代ギリシアでも、ギリシア人とはギリシア語を話し、ギリシア文化を享受する人々とされ、

¹⁵⁵⁶ ローマ人は地中海を「我らの海」（mare nostrum）と呼んだが、彼らの領土に囲まれた地中海は「湖」のような存在であった。

¹⁵⁵⁷ Rein Taagepera, *Size and Duration of Empires*, *Social Science History* 7, 1978, pp. 108-127, 117 and 126.

¹⁵⁵⁸ Kyle Harper, *The Fate of Rome: Climate, Disease, and the End of an Empire*, vol. 2, Princeton University Press, 2017, p. 31,

¹⁵⁵⁹ 帝政初期、属州は 50 近くあったが、分割統治制度（テトラルキア）が導入された帝政後期には属州も細分化され、その数は 2 倍程度に増えた。

¹⁵⁶⁰ Hans-Joachim Drexhage, Heinrich Konen and Kau Ruffing, *Die Wirtschaft des Römischen Reiches (1.-3. Jahrhundert)*, Eine Einführung, Walter de Gruyter 2002, p. 145.

¹⁵⁶¹ See Wolfgang Machreich, *Die Geschichte der Maut*, in <https://www.wienerzeitung.at/h/die-geschichte-der-maut>

¹⁵⁶² ティトゥス・リウィウスによると、ローマが建国された紀元前 8 世紀中頃、領内には女性が少なかったため、ロムルス王は近隣国のサビニから女性を誘致しようとしたが、交渉が失敗すると、サビニ人の女性を捕らえ、ローマに連れてきたとされている。See Titus Livius (Livy), *The History of Rome*, Book 1, Chapter I, 9.

¹⁵⁶³ Erich S. Gruen, *Romans and Jews*, in Jeremy McInerney ed., *A Companion to Ethnicity in the Ancient Mediterranean*, Wiley-Blackwell 2014, p. 4.

¹⁵⁶⁴ Louise Revell, *Roman Imperialism and Local Identities*, Cambridge University Press 2009, p. x.

血統は重視されていたわけではない。ヘレニズム期には世界市民という概念も生まれた(317頁参照)。また、東ローマ帝国に支配されていた時代のギリシア人は自らをローマ人(Ῥωμαῖοι/Rhōmaïoi)として捉えていた¹⁵⁶⁵。

2) 「ローマは三度世界を制した」

軍事力で地中海世界を支配したローマであるが、広大な領土の統治は容易ではなく、293年、帝国は4分割され、4人の正副皇帝が分担して治めることになった。この4分統治をテトラキアと呼ぶ(322頁参照)。なお、324~337年、コンスタヌス大帝は単独で支配した。また、テオドシウス帝は、394年の秋から東西で実権を握ったが、彼が翌年1月に亡くなると、分割統治が定着し、以後、帝国が再び一つになることはなかった。

「東」は1000年以上、存続する一方、「西」は約80年後に消滅したが、古都ローマ¹⁵⁶⁶ないし「第2のローマ」と目されたコンスタンティノープル発展したキリスト教はヨーロッパの精神的基盤として現在でも生き続けている(109、148頁参照)。

古代ローマの法律も同様であるが、ローマ法は東西分割後も発展し続けた。『ローマ法大全』が編纂されたのは6世紀である。12世紀から16世紀にかけてドイツ法に受け継がれると、その他の国にも広まり、諸国の法律に大きな影響を与えた(141頁参照)。

これらの点を踏まえ、ドイツの法学者イェーリングは「ローマは三度、世界を制した」¹⁵⁶⁷と述べている。つまり、ローマは政治(ヨーロッパ諸国の支配)、宗教(キリスト教)、法分野で大きな功績を残した。もっとも、宗教に関しては、ローマは支配された側である。

なお、古代ローマを承継した神聖ローマ帝国、「第2のローマ」としてのトリーアやコンスタンティノープル、「第3のローマ」としてのモスクワ等、後世、政治的ないし宗教的にローマの承継を自負する国や都市が現れた。中でも、神聖ローマ皇帝はカエサルの後継を自負し、ドイツ地方よりも、イタリア半島の統治に力を注いだ。

古代ローマの国章であり、ローマの象徴とされていた鷲は非常に多くの国や貴族、東方正教会の紋章に引き継がれている¹⁵⁶⁸。これに対し、ナポレオンはローマ皇帝との連続性を否定し、「フランス人民の皇帝」として即位した。

古代ローマは現代人、とりわけ、男性に影響を与えており、彼らは、毎日、少なくとも1回はローマについて想起すると言われている。これは強固な帝政、鍛え抜かれた兵士、壮大な建築物が男性らしさの象徴として捉えられていることによる。これに対し、女性がローマ時代について考えることは多くない¹⁵⁶⁹。



古代ローマの国章¹⁵⁷⁰

¹⁵⁶⁵ See Johannes Koder, „Rhomaioi“, Lexikon des Mittelalters, Band 7, LexMA-Verlag 1999, Sp. 797.

¹⁵⁶⁶ 西ローマ帝国の首都はメディオラーヌム(現ミラノ)であり、402年、ラウエンナ(現ラヴェンナ)に遷された。

¹⁵⁶⁷ Rudolf von Jherings, Geist des römischen Rechts auf den verschiedenen Stufen seiner Entwicklung, 1852.

¹⁵⁶⁸ なお、古代ローマは「単頭」の鷲を紋章にしていたが、東ローマ帝国、東方正教会、神聖ローマ帝国等の紋章で使われているのは「双頭」の鷲である。

¹⁵⁶⁹ Marlene Erhart and Julia Sica, Warum Männer anscheinend täglich an das Römische Reich denken, in <https://www.derstandard.de/story/3000000187574/>

¹⁵⁷⁰ 画像出典 <https://www.walksinsiderome.com/de/blog/about-rome/the-symbols-of-roman-history/>

なお、画像は著者により切り抜いてある。

SPQRはラテン語の Senatus Populusque Rōmānus (セナートゥス・ポプルスクエ・ローマーヌス)の略語であり、「ローマの元老院と人民」という意である。

3) ヨーロッパの古典・歴史の形成

ヨーロッパ諸国に共通の文化の形成に関し、ローマはより大きく貢献したと言える。つまり、欧州文化の源泉は古代ギリシアで形成され、紀元前5世紀から前4世紀にかけて大きく開花したが、それを受継し、広大な領土内に広めたのはローマ人である。それと同時に彼らはギリシア文化を基礎にしながら独自の文化を生み出し、それを諸地域にもたらした。この古代ギリシア・ローマ文化は「グレコ・ローマン文化」(Greco-Roman culture)とも呼ばれ、ヨーロッパの「古典」として位置づけられている(125頁参照)。また、彼らの歴史はヨーロッパの古代史、つまり、「古典古代」(308頁参照)にあたる。まさに、この文化や歴史の共有がヨーロッパ諸国の一体性を高め、EU統合を可能にしたと言っても過言ではない。

なお、ローマ帝国は、395年、東西に分割され、消失しており、他国に滅ぼされたのではない。分割後、西ヨーロッパに成立した西ローマ帝国はゲルマン傭兵部隊を率いていたオドアケルによって倒され、その後、領土内には多くのゲルマン国家が建てられた。つまり、ヨーロッパ共通の要素はヨーロッパ人によって破壊されることになる。東ローマはオスマン帝国に滅ぼされるが、その文化(ビザンツ文化)はスラブ人に継承され、現在でも東欧に影響を与えている。

【補説】ローマ・カトリック教会の聖地・聖都としてのローマ

古代ローマの歴史家タキトゥス¹⁵⁷¹によると、西暦64年、12使徒の中で最も権威があったペテロは帝都ローマで布教活動を行っている際、大火事の責任を問われて処刑され、この地で埋葬された。生前、イエスは彼の上に教会、つまり、神の国を建てると語ったとされ¹⁵⁷²、後世、ペテロの墓があった場所に**聖ピエトロ大聖堂**(251頁参照)が建てられた。また、ペテロは初代ローマ司教とみなされている。このように、ローマはペテロに縁のある古都であり、カトリック教会の総本山が創建されていることから、この教会の聖地として位置づけられてきた¹⁵⁷³。なお、1929年、教会は古都ローマを中心とする教皇領を放棄し、ローマ市内の中央部にバチカン市国を建設した(バチカンの面積は0.44km²である)。これを機に聖ピエトロ大聖堂の所在地はローマからバチカンに変わったが、従来通り、その所在地はローマとし、この古都を聖地として捉えることが多い¹⁵⁷⁴。

ローマを聖都ないし聖地と捉える見解は古くから存在するが、それを強固にしたのは、5世紀中頃にローマ司教を務めていた**レオ1世**(在位440~461年)である。ペテロの後継者であることを自負した彼は最初に「教皇」を名乗った人物でもあり、イエスの高弟に縁のあるローマを「世界の首都」と呼んだ¹⁵⁷⁵。なお、当時、ローマ帝国はすでに東西に分離していたが、分割統治はすでに3世紀後半に始まっており、それに伴い、帝都はローマから他の都市に遷されていた(322頁参照)。こうして帝都としての機能を失ったローマは聖都・聖地としての特性を強めることになる。東方教会の本山が置かれたコンスタンティノーブルや、アルプス以北の布教の本拠地となったトリーアは「第2のローマ」と呼ばれた¹⁵⁷⁶。

「第2のローマ」という表現はローマの首位性を前提にしており、381年、コンスタンティノーブルで開かれた公会

¹⁵⁷¹ Tacitus, *Annalen* 15, 44. See also Gerhard Waldherr, *Nero, Eine Biografie*, Pustet 2005, pp. 215-217.

¹⁵⁷² 『マタイの福音書』第16章第18節参照。

¹⁵⁷³ エルサレム(283頁参照)と**サンティアゴ・デ・コンポステーラ**も同様に聖地にあたる。後者はスペイン北西部に位置し、ガリシアの州都である。イエスの12使徒の一人である**ヤコブ**は、イベリア半島での布教活動を行った後、西暦44年頃、中東でローマのユダヤ提督によって殺害された。12使徒の中では最初に殉教し、遠く離れたイベリア半島で埋葬されたとされている。9世紀頃、彼の墓がサンティアゴ・デ・コンポステーラで発見されると、多くの信徒が巡礼に訪れ、聖地の一つとして目されるようになった。

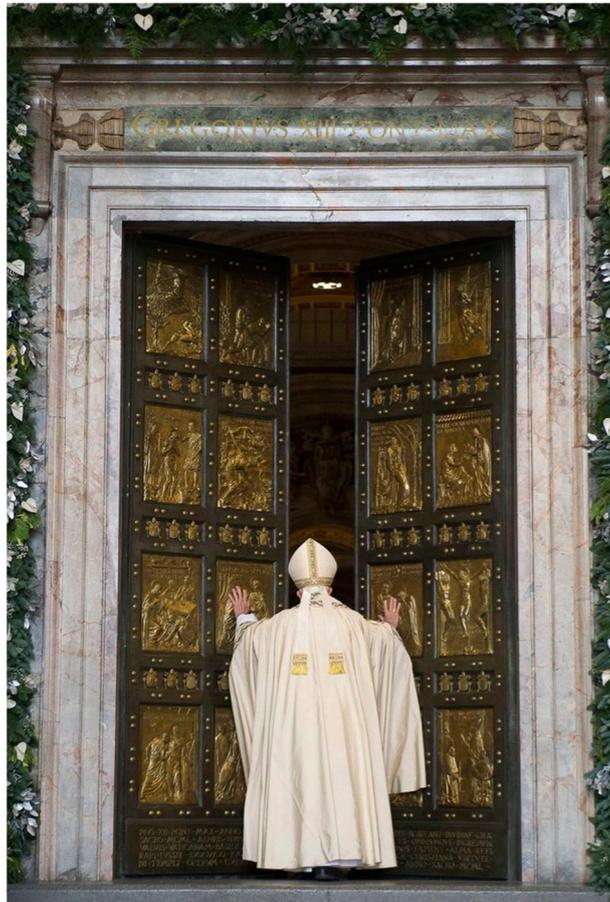
¹⁵⁷⁴ 聖ピエトロ大聖堂の所在地を「ローマ」とする資料として、Vatican News, *Alle fünf Heiligen Pforten in Rom geöffnet*, in <https://www.vaticannews.va/de/vatikan/news/2025-01/alle-heiligen-pforten-offen.html> を参照されたい。See also Die Deutsche Bischofkonferenz, *Das Heilige Jahr in Rom*, in <https://www.dbk.de/themen/heiliges-jahr-2025/das-heilige-jahr-in-rom>

¹⁵⁷⁵ *Lexikon des Mittelalters*, vol. 7, LexMA-Verlag 1995, "Romidee", pp. 1007-1011, 1008-1009.

¹⁵⁷⁶ 1453年、東ローマ帝国がイスラム勢力に滅ぼされ、コンスタンティノーブルが異教の都になると、モスクワが「第3のローマ」と目されるようになった(263頁参照)。

議でも、それが確認されているが、451年、カルケドンの公会議では、レオ1世の特使がいない隙を狙って、それを覆す決定が下された¹⁵⁷⁷。代わりにキリスト教の中心地になったのはコンスタンティノープルであるが、ローマ・カトリック教会はそれを認めず、現在まで続く教会の東西対立の要因を作ることになる(252頁参照)。

なお、帝都がローマから他の都市に遷され、皇帝も新都に移転すると、教会はこの都市の統治を皇帝より任されるようになった。8～9世紀、ローマを制圧したフランク王国もそれを承認したため、ローマ司教(教皇)による統治は強固になるが(119頁参照)、後世、ローマ皇帝の承継を自負する君主が現れ、教会が旧帝都を排他的に管理することに異議を唱えた¹⁵⁷⁸。同様に、イタリア人の中にも聖都としての性質を否定し、教会からこの都市を奪う試みが強まっていく。19世紀中頃、カトリック教徒の多いフランスは軍隊を派遣してローマを守っていたが、1870年、ドイツとの戦争に備えるため、撤退すると、イタリア人に占領された。翌年、ローマはイタリア王国の首都に指定され、聖都としての特性が弱まった。教皇はバチカン宮殿に立てこもり、イタリアによる占領に抵抗したが、1929年、ローマを放棄し、バチカン市国を発足させた(38頁参照)。これに伴い、聖ピエトロ大聖堂の所在地もローマ市からバチカンに変わった。



聖ピエトロ大聖堂の「聖なる扉」を開けるフランシスコ教皇(2024年12月24日)¹⁵⁷⁹

ローマ・カトリック教会は25年ごとに「聖年」を指定し、信徒に巡業を呼びかけている。2025年がこの年にあたり、前年12月24日、フランシスコ教皇は聖ピエトロ大聖堂の「聖なる扉」を開き、聖なる年を開始した。大聖堂の所在地はバチカン市国であるが、一般に、ローマとされている(注1574参照)。なお、カトリック教会はローマ市内にも教会を所有しており、これらの教会に赴くことも巡業としてみなされる¹⁵⁸⁰。

¹⁵⁷⁷ Henry Chadwick, *Die Kirche der antiken Welte*, Gruyter 1972, p. 239.

¹⁵⁷⁸ 神聖ローマ皇帝のフリードリッヒ1世バルバロッサや彼の孫のフリードリッヒ2世はローマの旧帝都としての性格を重視し、ローマ・カトリック教会が治めることに反発した。See Jürgen Strothmann, *Kaiser und Senat, Der Herrschaftsanspruch der Stadt Rom zur Zeit der Staufer*, Böhlau 1998.

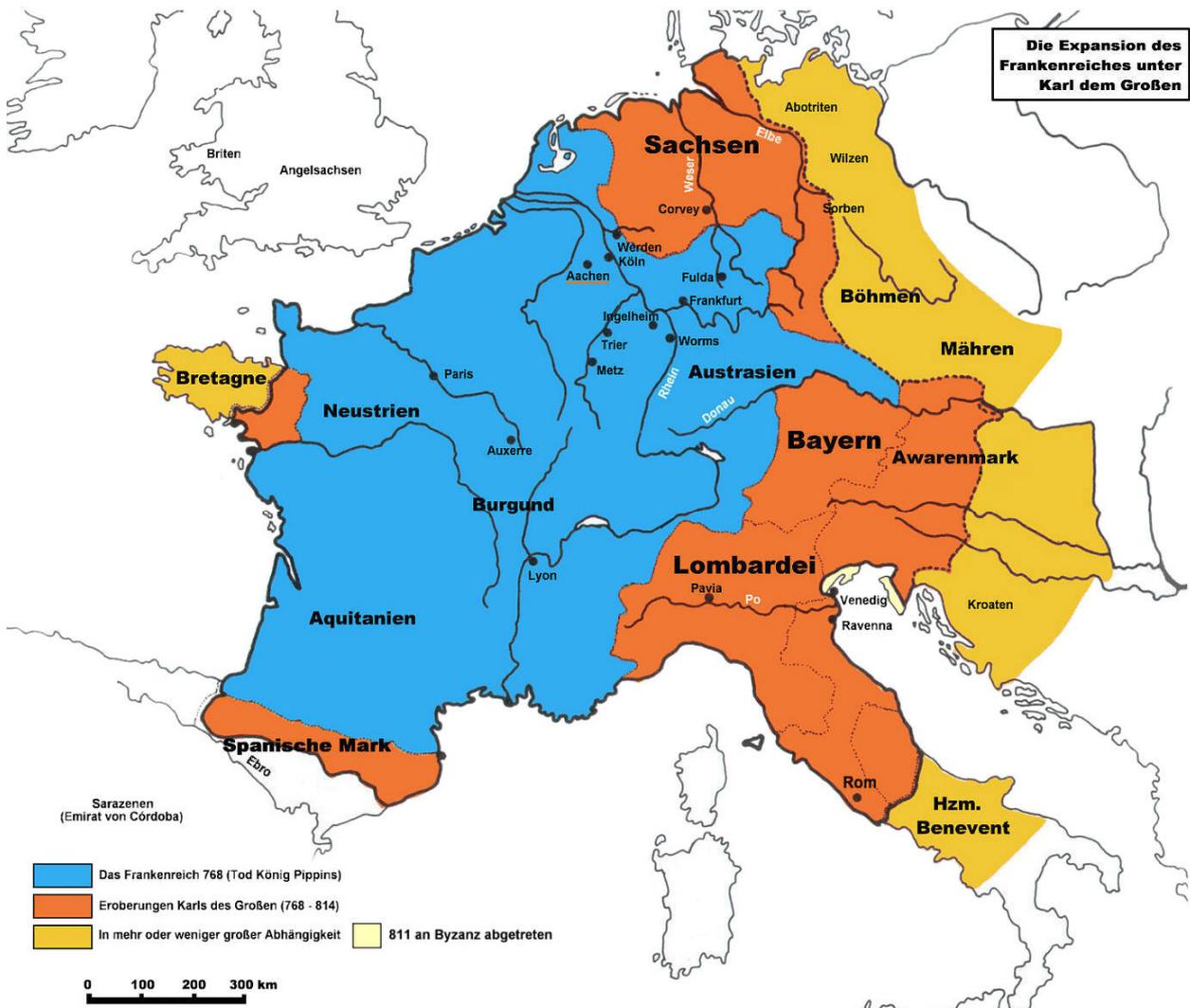
¹⁵⁷⁹ 画像出典 <http://www.jahrderbarmherzigkeit.at/pages/jahrderbarmherzigkeit/galerien/gallery/330.html>

¹⁵⁸⁰ Die Deutsche Bischofkonferenz, op. cit.

2. フランク王国による西ヨーロッパ支配 ～「最初のヨーロッパ人」としてのカール大帝～

5世紀、西ヨーロッパではゲルマン人が台頭し、幾つか王国を建設しているが、その中でも**フランク王国**は今日のEU統合につながる大きな功績を残した。この王国は、481年、ガリアの北西部で成立すると(328頁参照)、そのほぼ全域に領土を広げていった。**カール大帝**(在位768～814年)の時代にはドイツ、フランス、イタリア北部、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクの6ヶ国、つまり、設立当初のEC(今日のEU)に重なる広い範囲を支配するまでになる。

ただし、フランス北西部のブルターニュ(Bretagne)にはケルト人が国を建てており、フランク王国に併合されることなく、独立を維持した(331頁参照)。イタリア半島の南部にはベネヴェント公国が建てられていた。また、半島南端部やシチリア島は東ローマ帝国の領土であった。他方、イベリア半島の大部分はイスラム教徒に占領されており、フランク王国は辺境伯領(下図のSpanische Mark)を設置し、ムーア人の侵入を防いだ(484頁参照)。



フランク王国の版図¹⁵⁸¹

水色：ピピン3世(小ピピン)が768年に死去した当時

赤色：カール大帝の治世期(768～814年)

黄土色：フランク王国に従属していた地域 薄い黄色：811年、東ローマ帝国になった地域(アドリア海北岸)

¹⁵⁸¹ 画像出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Frankenreich_768-811.jpg

フランク王国はローマ・カトリック教国であったため（329 頁参照）、その領土拡大を通し、この宗教の布教範囲も拡大し、西欧のキリスト教化が進む。それに大きく貢献したのが国王の**カール大帝**であり、彼は度重なる遠征の末にドイツ北部（**ザクセン地方**¹⁵⁸²）を制し、その地に住むゲルマン人をキリスト教に改宗させた（330 参照）。なお、その約 30 年前（774 年）、カール大帝はイタリア半島に建てられていた**ランゴバルド王国**¹⁵⁸³を滅ぼし、教皇ハドリアヌス 1 世（在位 772～795 年）を保護している。また、799 年には、教会内の対立から逃れてきた次代の教皇レオ 3 世（在位 795～811 年）を支援し、対立者を排除してローマに帰還させた。これらの功績を称え、レオ 3 世は、翌 800 年、クリスマスのみさに参列するため、ローマを訪れたカール大帝にローマ皇帝の冠¹⁵⁸⁴を授けている。

カール大帝は伯（Graf）と呼ばれる地方管区長を任命し、征服した地域を治めさせる傍ら、定期的に巡察官を派遣し、地方行政を統制した。また、9 世紀初旬に制圧したザクセン地方では先住のザクセン人を王国内に移住させる一方で、王国の住民をこの地域に入植させた。このようにしてヨーロッパの諸地域・民族を従えただけではなく、キリスト教を広めた功績を称え、後世、カール大帝は「欧州の父」または「最初のヨーロッパ人」と呼ばれるようになる¹⁵⁸⁵。彼が今日のドイツ、フランス、ベネルクス 3 国、イタリア北部を治めていたことは、後世、これらの国でヨーロッパ統合を開始する基盤となった¹⁵⁸⁶。

フランク王国は首都を指定せず、王は各地を移動しながら国を治めた。王宮はパリにも建てられていたが、カール大帝は現ドイツ西部のアーヘンに最も長く滞在しており、この都市は「欧州の父」に縁のある古都になる。それにちなみ、1949 年、「アーヘン国際カール大賞」という名誉賞が創設され、ヨーロッパ諸国民の統合に貢献した人や、自由、人間性、平和という至高の善を守ることに貢献しうる人に贈られことになった。最初の受賞者は戦間期より汎ヨーロッパ運動を行っていたカレルギー伯（588 頁参照）で、2023 年はウクライナのゼレンスキー大統領が受賞した（マクロン大統領の受賞について、179 頁参照）。なお、授賞式は昇天祭（274 頁参照）の日にアーヘンの市庁舎で行われている。



カール大帝の像
(ドイツ歴史博物館所蔵)



ロンバルディアの鉄王冠

¹⁵⁸² なお、当時のザクセン地方（223 頁の地図参照）は現在のドイツ・ザクセン州とは異なり、ドイツ北部にあった。

¹⁵⁸³ ランゴバルド王国もゲルマン系の国であり、カール大帝は同国の王女と結婚するが、この国に脅かされていた教皇ハドリアヌス 1 世を救うために離婚し、王国を滅ぼした（774 年）。

¹⁵⁸⁴ この冠はキリストを十字架にはりつけるために使用された鉄の釘を叩き伸ばして作られたとされている。そのため、「鉄王冠」ないし「ロンバルディアの鉄王冠」とも呼ばれている。See Nadja von der Hocht, Die Eiserne Krone der Langobarden, in <https://historia-nobilis.de/index.php/insignien/2-die-eiserne-krone-der-langobarden>

「ロンバルディア」とはイタリア北西部にある地域の名称で、現ロンバルディア州（州都はミラノ）の名称の由来になる。ラテン語では「ランゴバルド」と呼ばれ、この地にあったランゴバルド王国の王はこの冠をかぶっていた。王国を滅ぼしたカール大帝は元義理の父親であるデジリウスよりこの冠を奪い、ランゴバルド王を名乗るが、本文中で述べたように、800 年には教皇レオ 3 世よりこの冠を授けられ、ローマ皇帝になる。

なお、ナポレオン 1 世は、1805 年 5 月、この鉄王冠を用い、ミラノで、イタリア王としての戴冠式を挙げている。フランス皇帝としての戴冠式は、前年 12 月、パリのノートル・ダム大聖堂で行われ、教皇も参列した（360 頁の注 1121 参照）。現在、鉄王冠はミラノ近郊のモンツァの大聖堂に保管されている。See von der Hocht, op. cit.

¹⁵⁸⁵ 799 年 9 月、教皇のレオ 3 世とカール大帝は現ドイツ西部のパダーボーン（Paderborn、557 頁参照）で落ち合っている。その時の様子を詠った叙事詩「カール大帝とレオ教皇」（Karolus Magnus et Leo papa/Paderborner Epos）で、大帝は「ヨーロッパの父」（pater Europæ）として捉えられているが、彼の影響力は欧州全土に及んでいたわけではないため、この表現は過剰である。カール大帝の 1200 回目の命日にあたる 2014 年 1 月 28 日、西洋諸国では再評価が行われた。See Rudolf Schieffer, Karl der Große nach 1200 Jahren, Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters 70, 2014, pp. 637–653.

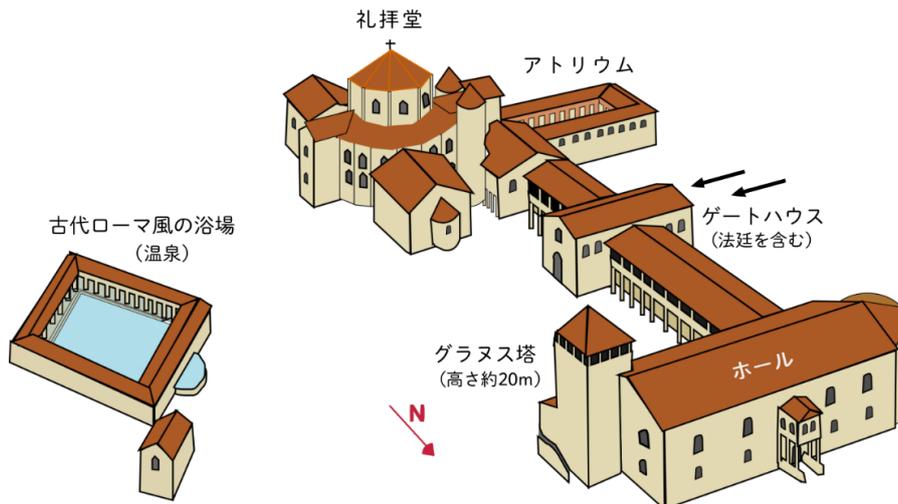
¹⁵⁸⁶ 1960 年代、当時のフランス大統領シャルル・ド・ゴールは、フランク王国（カロリング朝）の領土を念頭に置いた地域統合、つまり、フランス、ドイツ、ベネルクス 3 国を核とするヨーロッパ統合を提唱した（611 頁の注 1665 参照）。See bpb, Europa der Vaterländer, in <https://www.bpb.de/176853>

◎ アーヘン (Aachen)

古都アーヘン（2023年の人口は約23万）は、ドイツのほぼ最西端に位置する。ライン川に面しているわけではないが、その左岸に位置するため、ゲルマニアではなく、ガリアに属し、古くはケルト人が住んでいた。もっとも、前1世紀半ば、カエサルによって平定される頃には、ゲルマン人の居住区に変わっていた。その後、ローマ人は属州を建設し、先進の文化をこの北境の地にもたらした¹⁵⁸⁷。入浴を好んだ彼らにとって天然の温泉が湧き出るアーヘンは格好の植民市になり、数多くの浴場が建設されている¹⁵⁸⁸。

前述したように、アーヘンはドイツに属すが、この都市のドイツ化、つまり、広い意味でのゲルマン化が進むのは5世紀下旬、フランク王国がこの一帯で成立してからである。王国の最盛期を築いた**カール大帝**は、742年、アーヘン近隣のデューレン（Düren）で生まれたと考えられている¹⁵⁸⁹。当時、王宮はパリにも建てられていたが、カール大帝はこの温泉地を好み、とりわけ、冬季は痛風の治療を兼ね、ほとんどアーヘンで過ごした¹⁵⁹⁰。彼はローマの大浴場を再建するとともに、宮殿を拡張し、786年には、その附属施設として、礼拝堂の建築を開始した。814年、この地で生涯を終えると、自ら建てた「神の家」に埋葬されることになる。

後世、礼拝堂は増築され、幾つかの施設が融合した大聖堂に発展した。初期のビザンティン、ロマネスク様式にゴシック、バロックの要素が加わり、左右非対称で、複雑な構造をとる（530頁の画像参照）。内部にはカール大帝が作らせた王座が置かれており、936年から1531年まで、代々のドイツ王（ローマ王、529頁参照）はこの椅子に座り、王冠を授かるとされている。ドイツの歴史を刻んできたアーヘン大聖堂は、1978年、同国の建造物としては最初にUNESCOの世界文化遺産に登録された。



アーヘン王宮のイメージ（8世紀後半から9世紀初旬）¹⁵⁹¹

なお、フランク王国は首都を置かず、国王は各地を移動しながら国を治めており、アーヘンの人口は2000人程度であった。14世紀、ホールは市庁舎として再建され、現在に至る。また、グラヌスタを14メートル、高くするとともに、左右対称になるように、新たにマルクト塔が建てられ、市庁舎に組み込まれた（次頁の画像参照）。

¹⁵⁸⁷ 属州ガリア・ゲルギカと属州ゲルマニア・インフェリオル（下ゲルマニア）の境は明確ではないが（433頁参照）、アーヘンは後者に含まれていたと考えられる。See Marie-Therese Raepsaet-Charlier, Vielfalt und kultureller Reichtum in den civitates Niedergermaniens, Bonner Jahrbücher 2002/2003, p. 36.

¹⁵⁸⁸ Andreas Schaub, Aachen in römischer Zeit aus archäologischer Sicht, in Raban von Haehling and Andreas Schaub eds., Römisches Aachen, Schnell & Steiner 2013, pp. 162-168.

¹⁵⁸⁹ Portal Rheinische Geschichte, Karl der Große, in <https://rheinische-geschichte.lvr.de/Personlichkeiten/karl-der-grosse/DE-2086/lido/5acdc9f2207d09.41489983>

¹⁵⁹⁰ Wilfried Hartmann, Karl der Große, Kohlhammer 2010, pp. 118-119.

¹⁵⁹¹ 画像出典 https://de.wikipedia.org/wiki/Aachen#/media/Datei:Palais_d'Aix-la-Chapelle.svg（文字は著者が付けたものである）。

◎ 水の古都

カール大帝の時代、アーヘンはケルトの水の神 Grannus にちなみ、Aquaе Granni (グラヌスの水) と呼ばれていた。古いドイツ語で水は Ahha と言い、それが Aachen (アーヘン) に変わったと考えられている¹⁵⁹²。なお、フランス語でこの都市は Aix-la-Chapelle (エクス・ラ・シャペレ) と呼ばれ、直訳すると、「水の礼拝堂」となる。



アーヘン市庁舎¹⁵⁹³

アーヘン市庁舎は大聖堂から 100 メートルしか離れておらず、現在、その中間は長細い広場になっている。上掲の画像は大聖堂から撮影した市庁舎で、右側がグラヌスタである。

◎ 3 国国境地帯

前述したとおり、アーヘンはドイツの西端に位置し、オランダのマーストリヒト(71 頁参照)、ベルギーのリエージュ(473 頁参照) に隣接している。何れも

2000 年近い歴史を持つ古都であり、かつては同じ国に属していた。つまり、共通の歴史を持つ。1976 年、この「古都群」では、かつての地理的一体性を再現すべく、国境を越えた地域圏 (ユーロリージョ) が創設され、親睦交流や地域振興が図られている (558 頁参照)。



Euregio Meuse-Rhine (画像出典 <https://youregion-emr.eu>)

¹⁵⁹² See aachen.de, Mit Karl fing alles an, in https://www.aachen.de/de/stadt_buerger/aachen_profil/aachen-portrait/

¹⁵⁹³ 画像出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Aachen_BW_2016-07-09_11-56-24.jpg (画像は著者により切り取られてある)

3. 十字軍の編成

土地は息子達の間で分割相続されるというゲルマン人の伝統に則り、カール大帝の孫の世代（843年）、フランク王国は三つに分割された。こうして、ドイツとフランスの原型や、ベネルクス3国（ネーデルラント）の地理的一体性が形成されていく（331頁参照）。同じ頃、イングランドでは諸国の統一が実現した（500頁参照）。東欧では大モラビア国（511頁参照）やキエフ公国（516頁参照）が成立している。10世紀に入ると、ポーランド王国やデンマーク王国が建設された（223頁参照）。

※ イベリア半島におけるキリスト教国の成立について、484頁を参照されたい。

このように、9世紀以降、各地で新しい国が成立し、ヨーロッパは細分化されていく。建設されたのは何れも王国であり、君主達は争いを繰り返した。それには教皇との対立も含まれたが（334頁参照）、イスラム教徒の脅威は「聖なる父」の下で諸国が結束する機会を生み出した。なお、これは軍事的な同盟関係であるが、集団的安全保障ではなく、聖地エルサレムの奪還を目的としていた。

聖地は十字軍の遠征が始まる450年も前からイスラム教徒に占領されていた。7世紀前半にイスラム教が成立すると、彼らはすぐに聖戦（ジハード）を開始し、東ローマ帝国からシリア、パレスチナ、エジプト等を奪っていった。これに対し、首都コンスタンティノープルの対岸に位置する小アジアは、その後も帝国領であり続けたが、1071年、イスラム教に改宗したトルコ系の王国（セルジューク朝）がこの地域に進出し、帝国軍を倒した。また、南下してシリアや聖地エルサレムを他のイスラム勢力（ファーティマ朝）から奪った（418頁参照）。王の一族が小アジアで新しい王朝（ルーム＝セルジューク朝）を開き、東ローマ帝国を脅かすと、皇帝はそれまで対立していた教皇に東西ヨーロッパの結束を訴え、援軍を要請した。ローマ・カトリック教会の首長がこれに応じ、十字軍の編成を提唱すると、中世の騎士達は聖地エルサレムの奪回を目指して遠征するようになる。

遠征は11世紀末頃から13世紀にかけて、7回、または、8回、行われている。イングランド、フランス、（神聖ローマ帝国に加わっていた）オーストリア、両シチリア、ヴェネツィア等が参加し、東ローマ帝国軍と合流した。これは東西ヨーロッパ諸国が結束する機会になりえたが、君主達は対立を克服することはできなかった。特に、1187年、アイユーブ朝のサラディンがエルサレムを占領したことを受け編成された第3次十字軍は神聖ローマ皇帝のフリードリヒ1世（バルバロッサ赤髭王）、フランス王のフィリップ2世、イングランド王のリチャード1世（獅子心王）、オーストリア公のレオポルト5世等が自ら戦地に赴き、「諸王の十字軍」と呼ばれたが、協調性に欠け、聖地奪回を達成することはできなかった（419頁参照）。また、西欧の騎士達は東ローマ帝国をイスラム勢力から守ることができなかったばかりか、帝国内を通過する際、略奪を繰り返した。十字軍と帝国との友好関係は破綻し、第4次十字軍は帝国を滅ぼすことになる（420頁参照）。

右の画像：1096年、コンスタンティノープルで第1次十字軍を迎える東ローマ皇帝のアレクシオス1世



※ 十字軍遠征について詳しくは417頁以下を参照されたい。

4. 中世におけるヨーロッパ諸国の統一構想

十字軍遠征は教皇の「参加すれば、罪は赦される」という言葉を受けて始まり、遠征がピークに達した12世紀初旬には「聖なる父」の権勢も頂点に達した（421頁参照）。しかし、聖地回復という目的を最終的に達成できなかったこともあり、教皇の権威は失われていった。これとは対照的に、フランスでは王権が強まり、国内では何者にも屈さないという思想が確立する（460頁参照、また、フランス国王による教皇の統制について、336頁参照）。

このような状況下、フランス人のピエール・デュボア（Pierre Dubois）は、1306年、新たな十字軍の遠征を想定し¹⁵⁹⁴、キリスト教国の統一を提唱した。これは平和の確立を目的としており、彼は和平を乱す者を厳しく罰する機関の設立につ

¹⁵⁹⁴ 実際には十字軍の遠征が再開されることはなかった。

いて説いている。また、経済活動に関する制度や教育・職業訓練制度の統一を訴えた¹⁵⁹⁵。しかし、諸国が主権を放棄し、新しい国を建設するこの構想は画期的であり、王権が強化されていく当時の傾向に反していたため、実現しなかった。

5. 「オスマンの脅威」(東ローマ帝国やハンガリーの征服、ウィーン包囲) に備えた統合構想

十字軍遠征が最盛期に達した 13 世紀初旬 (1206 年)、チンギス=ハンが東アジアの北部に**モンゴル帝国**を建設した。モンゴル人は南下して中国地方を制圧すると、1271 年、元王朝を開くが、それよりも早い 1240 年、第 2 代皇帝のオゴタイは西方に遠征し、キエフ公国 (516 頁参照) を倒している。彼はさらに西へと兵を進め、ポーランド地方を襲った。このアジア人の来襲は西ヨーロッパを震撼させたが (421 頁参照)、その約 200 年後、オスマン帝国がコンスタンティノープルを攻略し、東ローマ帝国を滅ぼしたことは、より大きな衝撃を与えた (423 頁参照)。イスラム勢力に対抗するため、ヨーロッパ統合の精神が芽生える。

東ローマ帝国消滅の約 10 年後 (1462 年)、ボヘミア王の**イジー・ス・ポジェブラト** (Jiří z Poděbrad/Georg von Podiebrad 画像右)¹⁵⁹⁶は、21ヶ条からなる連合構想を打ち立て、全ヨーロッパ諸国の代表が参加する常設議会の設置や、オスマン帝国と戦う軍隊の設立等を提唱した。なお、それには通貨統合も含まれていた。彼は諸国に使節を派遣し、構想の実現を目指したが、国々が対等な地位で参加する組織は当時としては非常に革新的であり、自らの優位を主張する封建君主や教皇¹⁵⁹⁷の支持を得るには至らなかった。次代の教皇はポジェブラトを見限り、教会から破門している¹⁵⁹⁸。



それから約 50 年後の 1517 年、人文学者のエラスムス (341 頁参照) は『平和の訴え』(Querela pacis) と題する著作の中で、国際連合 (国連) に似た諸国の連合構想を提唱し、大きな注目を集めたが、実現しなかった。

その後、「トルコの脅威」はより現実的になり、1526 年、ハンガリーとクロアチアの国境沿いに位置するモハーチでキリスト教徒連合軍 (神聖ローマ帝国、ハンガリー、ボヘミア) を倒した。この戦いで、ハンガリーの国王は敗死し、ヤゲワ朝は断絶した。3 年後、オスマン帝国はオーストリアの首都ウィーンを包囲するまでになるが (424 頁参照)、本学的な冬の到来を待たずに撤退したため、オーストリアは存亡の危機から脱することができた。

ウィーン包囲にはフランスを支援する意義があった。前述したように、その 3 年前 (1526 年)、オスマン帝国はハンガリーを倒しているが、モハーチの戦いでハンガリー国王のラヨシュ 2 世が敗死すると、王位はオーストリア=ハプスブルク家に移った。同時にボヘミアの王位も、このオーストリア貴族が相続したが (451 頁の注 1323 参照)、これはフランスを警戒させることになり、仏国王はオスマン帝国と同盟を結成した。なお、両国提携の一環として、1536 年ないし 1569 年、「ヨーロッパの商人」と呼ばれていたオスマン帝国はフランスに通商特権 (カピチュレーション capitulation) を与えた。それには帝国内における領事裁判権や聖地エルサレムの管理権が含まれており、聖地に建てられていた教会の使用をめぐる、フランス (ローマ・カトリック教会) は東方教会と対立するようになる (242 頁の注 739 参照)。

6. ハプスブルク家の婚姻政策を通じた統合 (ヨーロッパ支配) とヴェストファーレン体制

ハプスブルク家は、10 世紀中頃、アルザス地方を治めていたドイツ貴族を祖とする。1273 年、まだ弱小貴族の一人に過ぎなかった当主のルドルフが神聖ローマ皇帝に選出されると家運が開け、5 年後、彼はオーストリア公を兼ねていたボヘミア王のオタカル 2 世を倒し、オーストリアを奪った (451 頁参照)。こうしてハプスブルク家はドナウ川沿いでも領

¹⁵⁹⁵ Pierre Dubois, De recuperatione terrae sanctae, 1306. なお、同書のタイトルは『神聖なる国の回復について』と訳すことができる。

¹⁵⁹⁶ 1419 年、神聖ローマ帝国・カトリック教会と (プロテスタントの先駆けである) フス派の間で、**フス戦争**と呼ばれる宗教戦争が勃発するが (337 頁参照)、翌 20 年、フス派発祥の地ボヘミア (512 頁参照) で**ポジェブラト**は生まれた。彼はフス派の貴族の一人に過ぎなかったが、ボヘミア王ラディスラウスが早逝すると、1458 年、議会によってボヘミア王に選出された。当初、教皇はポジェブラトを異端者とみなし批判したが、オスマン帝国の侵略からヨーロッパを防衛することを期待し、王位を承認した。

¹⁵⁹⁷ 当時の教皇ピウス 2 世 (在位 1458~1462 年) 自身もオスマン帝国に対抗するため、ヨーロッパ諸国に十字軍の編成を訴えていたが、支持されなかった。

¹⁵⁹⁸ Richard Plaschka, Georg von Podiebrad, Neue Deutsche Biographie, Band 6, Duncker & Humblot 1964, pp. 200-203.

土を得るが、同家は、それ以前より一族をヨーロッパの王侯・貴族と結婚させ、所領を拡大してきた。この婚姻政策を推し進めることで、16世紀には世界各地に領土を持つようになる。とりわけ、**マクシミリアン1世**は、1477年、ヨーロッパで最も経済的に潤い、優れた文化を誇っていたブルゴーニュ公国（535頁参照）の公女マリーと結婚し、一族繁栄の基盤を作った。二人の間に生まれたフィリップは母親よりブルゴーニュ領ネーデルラント（現ベネルクス3国）を相続し、ハプスブルク家の所領に加える。

マクシミリアン1世 → フィリップ → カルロス1世（カール5世）

フィリップはカスティリヤ王国の王女ファナと結婚し、彼女と共にカスティリヤを治めた。なお、この王国は実質的にスペインであり（485頁参照）、両者の長子はスペイン国王**カルロス1世**として即位した。彼は父方のハプスブルク家の血をひく者として神聖ローマ皇帝にもなり、同皇帝としては**カール5世**と呼ばれた。また、オーストリア大公としてはカール1世、チロル伯としてはカール5世、ブルゴーニュ公やルクセンブルク公としてはシャルル2世、リンブルフ公としてはシャルルと称したが、その他にも多くの国や地域の君主を兼ねた。

これはフランス国王のライバル心を掻き立てることになり、1519年、仏王のフランソワ1世は、カール5世の対抗馬として、神聖ローマ皇帝（ドイツ王）の選挙に立候補している。選挙に敗れたフランソワ1世は、神聖ローマ帝国をはさみ打ちするため、オスマン帝国（スレイマン1世）と提携した（前述参照）。

なお、カール5世は1519年に神聖ローマ皇帝として即位するよりも早く、スペイン国王になっていた¹⁵⁹⁹。その翌年（1517年）、ルターが神聖ローマ帝国内で宗教改革を開始する。また、1526年、オスマン帝国のスレイマン1世がバルカン半島を北上し、ハンガリーを制圧した（前頁参照）。この激動の時代に、ローマ・カトリック教会と西欧社会の守護神として活躍したのがカール5世であるが、彼はルター派の弾圧に失敗し、その信仰を認めることになった（351頁参照）。

オスマン帝国による東ローマ帝国の征服（1453年）やルターの宗教改革（1517年）によって中世は終わる。この時代区分では封建制が発展し、騎士が活躍したが、前出のマクシミアリアン1世（カール5世の祖父）は最後の騎士とみなされている（348頁参照）。



Bernhard Strigel『マクシミリアン1世と家族』（1515年頃作）

〔後列左より〕

- マクシミリアン1世（神聖ローマ皇帝）
- 息子のフィリップ
- マクシミリアン1世の妃のマリー（ブルゴーニュ女公）

〔前列左より〕

- 孫のフェルディナント（皇帝、ハンガリー王、ボヘミア王）
- 孫のカール（皇帝、スペイン王、ブルゴーニュ公）
- ラヨシュ（ハンガリー王、ボヘミア王）

ラヨシュはマクシミリアン1世の孫ではなく、孫（カールとフェルディナントの妹）と結婚した。ラヨシュの姉もマクシミリアン1世の孫（フェルディナント）と結ばれている。

なお、1526年、ラヨシュがモハーチの戦いでオスマン軍に敗れ、敗死すると、ハンガリーとボヘミアの王位はフェルディナントが引き継いだ（451頁参照）。

¹⁵⁹⁹ カール5世は、516年、母親のファナと共にスペインの君主になる。1555年に母親が亡くなるまで共同統治体制が続いたが、後述するように、その翌年、彼は隠居した。

1529年9月、オスマン軍はオーストリアの首都のウィーンを包囲したが、季節外れの大雪の影響もあって陥落させることはできず、翌月、撤退した。なお、1526年、オスマン帝国との戦いでハンガリー王（ラヨシュ2世）が敗死すると、ハプスブルク家が王位を相続した（451頁の注1323参照）。スペインがアメリカや東南アジアに持っていた領土を含めると、このオーストリア貴族は世界各地を支配していたことになる（32頁参照）。なお、イタリア半島南部のナポリやシチリア島は両シチリア王国（ナポリ王国）に、また、サルデーニャ島はサルデーニャ王国に属したが、両国はアラゴン、つまり、スペインの支配下にあったため、ハプスブルク家の所領として位置づけられた。



16世紀前半のハプスブルク家の所領¹⁶⁰⁰

1) 所領の分割 (1556年)

広大な領土の統治は容易ではないため、1556年の隠居に際し、カール5世（スペイン国王としてはカルロス1世）は実家をオーストリア＝ハプスブルク家とスペイン＝ハプスブルク家に分割した（486頁参照）。

上図で示されているように、16世紀前半、ポルトガルはハプスブルク体制に組み込まれていないが、カール5世は、1526年、ポルトガルの王女イザベルと結婚し、二人の間に生まれたフェリペ2世はポルトガルを相続した（496頁参照）。ただし、その当時、ハプスブルク家はすでにオーストリア＝ハプスブルク家とスペイン＝ハプスブルク家に分かれており、ポルトガルは後者の所領となった。

2) フランス・ブルボン家との対立と30年戦争 (1618～1648年)

ハプスブルク家の勢力拡大はフランス国王の対抗心を掻き立てた。また、フランスは同家が治める神聖ローマ帝国とスペインに両側から挟まれることになり、警戒するようになる。このような状況下、ポヘミアの新教徒（フス派）が神聖ローマ帝国ないしハプスブルク家に対して反乱を起こすと、フランス（ルイ13世）はフス派を支援し、介入した。1618年

¹⁶⁰⁰ 画像出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Habsburg_Empire_of_Charles_V.png

から30年も継続したため、**30年戦争**と呼ばれるこの宗教戦争にはイングランド、スペイン、スウェーデン、デンマーク等も参加し、「最初のヨーロッパ大戦」と目されている(355頁参照)。主戦場となった神聖ローマ帝国(ドイツ)は長年の戦闘で荒廃し、人口も激減したため¹⁶⁰¹、帝国が譲歩し、戦いを終わらせることになった。

3) ヴェストファーレン体制 (17世紀後半)

1644年、ドイツ西部のヴェストファーレン地方(355頁の注1115参照)で講和会議が始まると、戦争に加担していなかった国や地域からも使節が派遣されてきた。参加しなかった主要国はイングランドとロシアのみである。この大規模な会議の成果として、1648年、二つの条約が制定された。両者はまとめて**ヴェストファーレン条約**(ラテン語読みでは**ウェストファリア条約**)と呼ばれる。また、新教の信仰を認めるだけでなく、以下の国際問題について定めたため、「国際法の祖」と目されている。

なお、この戦争期、オランダのフーゴー・グロティウス(1583~1645年)は『戦争と平和の法』を著し、戦争を人間の最も野蛮な行為と批判する一方、戦争も法に服すと述べた。後世、彼は「国際法の父」と呼ばれるようになるが、諸国間の関係について定めた法、つまり、国際法は欧州で戦争が多発したこの時期に成立した。



ヘラルト・テル・ボルフ(Gerard ter Borch 1617-1681年)画

『ミュンスター条約の締結』

ミュンスター条約とオスナブリュック条約を合わせてヴェストファーレン条約と呼ぶ。

- ・フランスはロレーヌ地方の大分部と引き換えにアルザス地方(594頁参照)を、スウェーデンはブレーメンを含むドイツ北部の諸要地を神聖ローマ帝国より獲得する。
- ・スイスの帝国からの独立、ネーデルラント(オランダ)のスペインからの独立を国際的に承認する。なお、この条約に基づき、ネーデルラントは帝国を脱退することになった。

スペイン(スペイン=ハプスブルク家)はこの条約に署名せず、フランスとの戦争を継続した。両国がピレネー条約を締結し、戦争を終わらせたのは、30年戦争の終結から10年余が経過した1659年である。和解の印として、翌年、フランス国王のルイ14世とスペイン王女マリア・テレサ(マリー・テレーズ・ドートリッシュ)が結婚した。その30年後(1700年)には二人の孫がスペイン国王として即位するが、フランスの覇権強化はイギリス、オーストリア等の反発を招き、新たなヨーロッパ大戦を引き起こすことになる(487頁参照)。

4) ハプスブルク帝国(ドナウ帝国)

ところで、16世紀前半から19世紀初旬にかけて、ハプスブルク家は所領のオーストリア、ハンガリー、ボヘミア、スロベニア、クロアチア、北イタリア、ネーデルラント等で構成される「**ハプスブルク帝国**」を築いた¹⁶⁰²。これによって実現した「ミニチュア版のヨーロッパ」(Europa im Kleinen)ないし「カトリック教徒のヨーロッパ」はオーストリアの特性の一つになっている(29頁参照)。なお、帝国はドナウ川流域に位置していたため、「ドナウ帝国」とも呼ばれた。

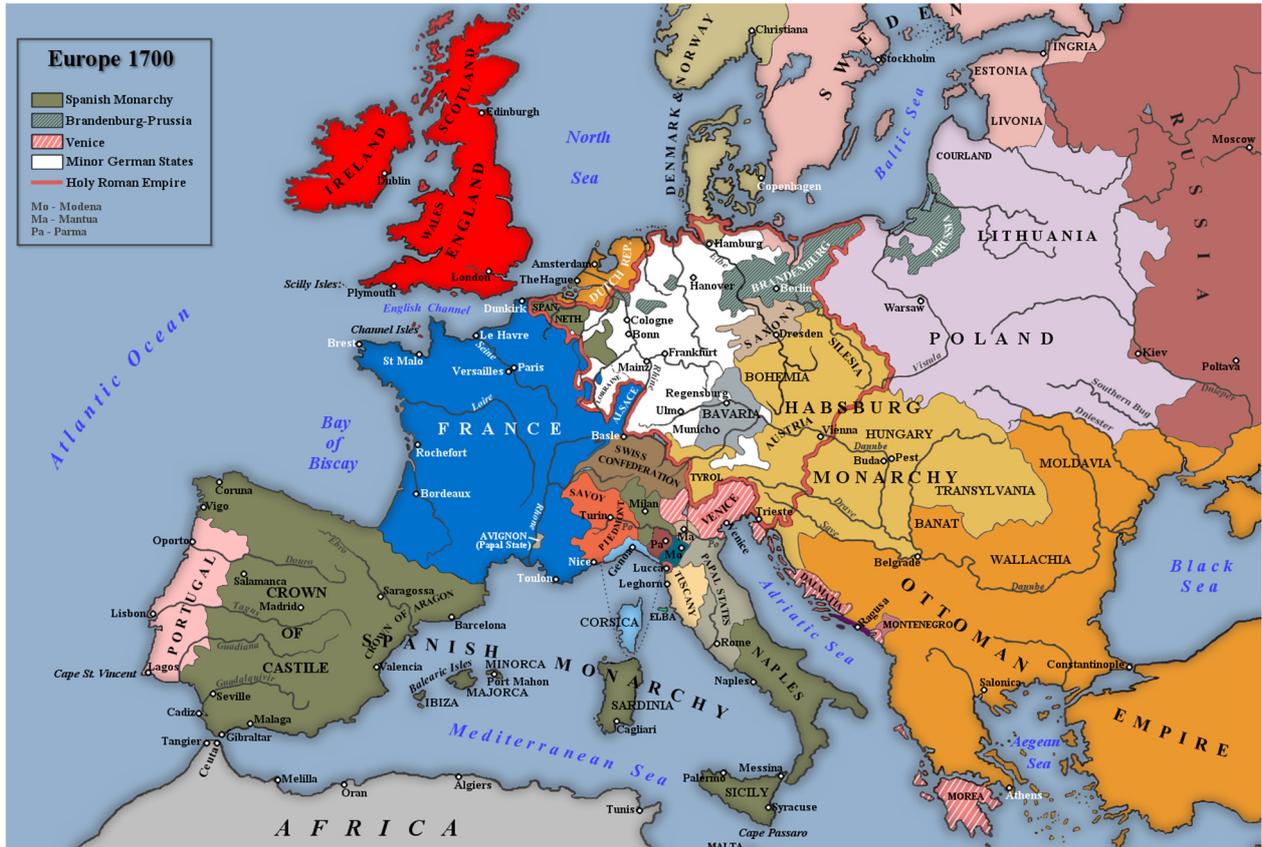
¹⁶⁰¹ 戦争中、ドイツ地方の人口は3分の1近く減ったとされている。都市部だけではなく、農村も略奪の対象になり、国全体が荒廃した。See Generaldirektion der Staatlichen Archive Bayerns, Menschen im Krieg, Die Oberpfalz 1618 bis 1648, München 2018, p. 43.

¹⁶⁰² ただし、正式に「オーストリア帝国」が成立したのは、フランツ2世がナポレオンに対抗し、オーストリア皇帝を名乗った時である(453頁参照)。

7. 絶対王政期におけるヨーロッパの統合論

16世紀、婚姻政策を通じてネーデルラントやスペインを手に入れたハプスブルク家はフランスを東西から挟む形になり、この隣国を警戒させた。もっとも、歴代の神聖ローマ皇帝を輩出したこの大貴族が悠然としていたわけではなく、東方から「トルコの脅威」に晒された。また、領土内ではキリスト教徒間の対立が繰り返され、所領は疲弊した。宗教戦争はフランス国内でも発生し、国政は混乱したが、同国は神聖ローマ帝国における宗教戦争にも介入した(351頁参照)。

このような状況下、平和を構築する手段として、国家連合の創設が検討されるようになる。中でも、フランス国王のアンリ4世(在位1589~1610年、352頁参照)は独自の裁判所と軍隊を持ち、和平を乱す国に対しては制裁を科すことのできる国際組織の設立に思いを巡らせている。この組織には神聖ローマ帝国を含む国々が主権を維持したまま加盟するものとされ、諸国が皇帝を選出することも考えられていた。しかし、アンリ4世は自国内の宗教対立に巻き込まれて暗殺されたため、構想は実現せず、歴史上、最初のヨーロッパ大戦と目されている**30年戦争**の勃発を防ぐことができなかった。



1700年のヨーロッパ

その後、ヨーロッパでは国王ないし君主が権勢を増し、絶対主義が確立されていくが、18世紀に入ると、王権神授説や君主の権威を否認する啓蒙思想家が現れ(358頁参照)、諸国統合の必要性が(再び)提唱されるようになる。例えば、フランスのサン＝ピエール(Charles-Irénée Castel de Saint-Pierre)は、国境を越えた経済活動を円滑にするため、租税や交通規則を統一する国家連合の創設を提言した。彼の構想は実現しなかったが、後世の統合論に大きな影響を与えた¹⁶⁰³。

また、以下の者も、平和を確立するため、諸国の結束・連携を訴えたが、ヨーロッパの君主は自らの権威や優位性を放棄しなかったため、何れも実現するには至らなかった。

- ・ *William Penn*¹⁶⁰⁴, *An Essay towards the Present and Future Peace of Europe*, 1693
- ・ *John Bellers*, *Some Reasons for a European State*, 1710
- ・ *Rousseau*, *Projet pour la Paix Perpetuelle*, 1760
- ・ *Bentham*, *Plan for a Universal und Perpetual Peace*, 1843

¹⁶⁰³ Javier Vergara, *The History of Europe and its constituent Countries: considerations in favour of the new Europe*, *Journal of Social Science Education*, Volume 6, Number 1, 2007, pp. 15-22.

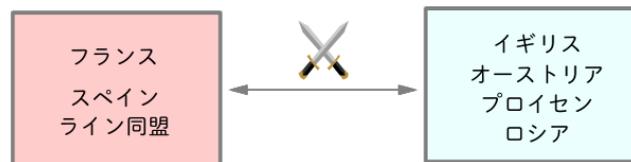
¹⁶⁰⁴ イギリス人のウィリアム・ペンは、ヨーロッパ諸国の代表が参加する議会の設立を提唱している。

8. ナポレオンによるヨーロッパ支配とウィーン体制

啓蒙思想が社会を変えていく中、19世紀に入ると、ナポレオン1世が欧州の広い範囲を軍事力で統合することに成功する。彼はイギリス、ポルトガル、スウェーデン、バルカン半島南部¹⁶⁰⁵、シチリア島、サルデーニャ島等¹⁶⁰⁶を除いたヨーロッパ諸国・地域を支配したが、それらの全てをフランスに組み入れたのではない。併合したのは、主に、宿敵オーストリア＝ハプスブルク家から奪った地域であるが、教皇領やカタルーニャも併合の対象になった（584頁の地図参照）。

それ以外の国とは同盟関係を結び、一種の地域統合が実現している。特に、オーストリア、プロイセン、ロシアといった列強を一連の戦争で倒したものの、3国の存続を認め、連携した¹⁶⁰⁷。とりわけ強く敵対視していたオーストリアからは皇帝の娘を后として迎え、ナポレオンは皇帝の義理の息子となる（1810年4月）。

なお、同盟関係にあった諸国がフランスに完全に屈服していたわけではなく、度々、**対仏大同盟**を結成し、ナポレオンと対戦した。つまり、諸国も軍事統合を繰り返した。同盟に参加しない国や地域でも民族主義が高まり、解放運動が行われている（360頁の注1122参照）。



◎ 対仏大同盟

対仏大同盟とはフランス革命期からナポレオン帝政期にかけて（18世紀末～19世紀初旬）、フランスと対立したヨーロッパ諸国が結成した短期的な軍事同盟であり、イギリスが主導した。1793年3月に最初の同盟が結成された後、3～6回、解散と再結成を繰り返している。第1次結成から辛酸を嘗め続けていたが、1814年4月、ナポレオンを退位に追いやり（また、1815年6月、最終的に失脚させ）、目的を達成することができた。

この軍事同盟は、ナポレオンが将軍を務めていた時期にも結成されており、彼が率いた革命政府軍と対戦している。なお、神聖ローマ帝国に加盟していたドイツ諸邦のほとんどは同盟に参加せず、ナポレオンの側に付いたため（435頁参照）、ドイツ人同士で交戦することになった。

① 第1次大同盟は1793年3月、フランス革命政府によるルイ16世の処刑やベルギー侵攻に危機感を抱いたイギリスによって提唱され、オーストリア、プロイセン、オランダ、スペイン、サルデーニャ（369頁の注1144参照）、ナポリが参加した。

1796年3月、ナポレオンが指揮するフランス革命軍はオーストリア領の北イタリアに遠征し、サルデーニャ、オーストリアの連合軍を撃破する。同年10月、カンポ・フォルミオの和約（453頁参照）が締結され、戦争が終わると、対仏大同盟は解散した。

② 第2次同盟は、1799年、ナポレオンのエジプト遠征を機に成立し、イギリス、オーストリア、ロシア、オスマン等が加わった。なお、プロイセンは中立をとり、参加していない。仏軍はエジプトで敗れたが、大陸ではオーストリアに大勝し、対仏大同盟を解散させた。1800年、ナポレオンはアルプス山脈を越えて北イタリアに侵攻し、この地域からオーストリアを一掃する（453頁参照）。



『ナポレオンのアルプス越え』
ジャック＝ルイ・ダヴィッド作
(1802年)

¹⁶⁰⁵ バルカン半島の北限には争いがあるが（85頁参照）、ナポレオンはオーストリアからスロベニア、クロアチア、ダルマチアを奪ってフランスに併合し、1809～1813年、**イリュリア州**（Provinces illyriennes）とした。

¹⁶⁰⁶ 地中海上のシチリア島とサルデーニャ島にはイギリス軍が駐留し、ナポレオン軍の上陸を防いでいた。

¹⁶⁰⁷ ナポレオンはオーストリアとプロイセンの首都に入城している（462頁の注1346参照）。敗戦を受け、プロイセン国王は、1806年10月、首都を放棄し、ケーニヒスベルク（現カリングラード、iv頁の地図参照）に逃れた。

③ 3 回目の結成は、1805 年、ナポレオンの皇帝就任を機に行われ、イギリス、オーストリア、ロシア、スウェーデンが加わった。なお、プロイセンは前回に続き、中立を維持した。イギリスは**トラフォルガーの海戦**でフランス・スペイン軍を破ったが、オーストリア・ロシアは**アウステルリッツの三帝会戦**で敗退し、同盟は崩壊する。

1806 年、ライン同盟の発足 (435 頁参照) を機に、イギリス、ロシア、プロイセンが同盟を結成しており、これを第 4 次と捉えることがある。仏軍はイエナの戦いでプロイセン軍を降した後、ベルリンに入城し、**大陸封鎖令** (462 頁参照) を出す。さらに、フリートラントの戦いでロシアを撃退し、同盟を解散に追いやった。

1808 年、ナポレオンがスペインに攻め入ると、イギリスはスペインを支援した。翌年、イギリスはオーストリアと同盟関係を結んでおり、これを第 5 次とすることがある。オーストリア軍を倒した仏軍がウィーンに入城し、シェンブレン和約が結ばれると、同盟は消滅した (453 頁参照)。

④ 1812 年、ナポレオンはロシアに大陸封鎖令を守らせるため、モスクワに遠征しているが (注 1614 参照)、プロイセンとオーストリアはナポレオン軍への支援を強要されていたこともあり¹⁶⁰⁸、対仏大同盟は結成されていない。しかし、フランス皇帝が遠征に失敗すると、翌年、第 4 次 (ないし第 6 次) 同盟がイギリス、オーストリア、プロイセン等によって結成された。10 月、同盟軍は**諸国民の戦争** (ライプツィヒの戦い) で勝利を挙げ、逃げるナポレオンを追ってパリに入ると、彼を追放し、ブルボン朝を復活させた。1793 年に第 1 次同盟を結成してから相次いで敗れてきた諸国は、ようやく雪辱を果たし、解散した。

1815 年、ナポレオンが流刑地のエルバ島からパリに帰還すると、ウィーン会議に参加していた諸国は、急遽、同盟を結成しており、これを 5 回目または 7 回目と数えることがある。同盟軍はワーテルローの戦いで勝利を収め、解散した。また、フランス皇帝との戦闘も最終的に終わった。

1) ナポレオンによるヨーロッパ支配

17世紀から18世紀前半にかけてフランスでは絶対王政が確立し、諸国のモデルにもなるが、1789年7月、革命が起き、ルイ16世は失墜した。国王は直ちに処刑されたのではなく、恐怖政治の象徴となるギロチン (断頭台) で刑が執行されたのは1793年1月である (360頁参照)。その波及を恐れたヨーロッパの君主国は対仏大同盟を結成し、フランスと対戦した。**フランス革命戦争**と呼ばれる一連の戦いにおいて将軍として頭角を現したのが**ナポレオン**である。1799年11月、彼はクーデターを起こして新政府を立ち上げると、その第1統領となり、独裁を開始した。1804年5月にはフランス皇帝の座に上り詰める。

なお、彼が帝位に就く前より、フランスはベルギー¹⁶⁰⁹、ルクセンブルク、神聖ローマ帝国領のライン川左岸地域、イタリア北部を併合ないし占領していた (オランダの占領について、469頁参照)。その一部にナポレオンは将軍として関わっており、各地に遠征しているが (581頁参照)、皇帝になると諸国と和解し、フランスに平和をもたらす。しかし、すぐに翻意し、軍事力によるヨーロッパ支配に乗り出した。立法者としても精力的に活動した彼は欧州各国の法の統一、単一のヨーロッパ民族の創設、また、パリをヨーロッパの首都にする構想を抱いていた。

1805年8月、イギリス、オーストリア、ロシア、スウェーデンは**第3次対仏大同盟**を結成し、ナポレオンと戦ったが、彼の勢いを止めることはできなかった。同年12月、フランス皇帝はオーストリア皇帝とロシア皇帝との戦い (三帝会戦) を制す。翌年7月には、プロイセン、オーストリアに次ぐ「第3のドイツ」を創設するため、ドイツ諸邦に**ライン同盟**を結成させた (435頁参照)。これに伴い、諸邦が神聖ローマ帝国から脱退すると、帝国は崩壊した。

1806年11月、プロイセンを攻略し、その首都ベルリンに入城したナポレオンは、イギリスを孤立させるため、この遠征地で**大陸封鎖令** (462頁参照) を出す。翌年、ロシアを倒し、同国にも封鎖令を守らせると、大陸支配が確立する。

¹⁶⁰⁸ プロイセンは1806年、オーストリアは1808年、ナポレオンとの戦いに敗れ、彼と同盟関係を結ばされた。

¹⁶⁰⁹ 厳密には、ベルギーと呼ばれる国はまだ成立していない (475頁参照)。

◎ 君主国の創設

革命によってフランスでは王政が倒されたが、新しい君主となったナポレオンは攻略した地域に以下の国を建設し、主に身内を君主に叙した¹⁶¹⁰。

- ・ベルク公国 (旧神聖ローマ帝国内)
- ・ヴェストファーレン王国 (同上)
- ・フランクフルト大公国 (同上)
- ・ホラント王国 ※ 1810年に廃止され、フランスに併合されることになる (469頁参照)。
- ・ワルシャワ大公国 (旧プロイセン領内、次頁参照)

なお、ナポレオンは皇帝に即位する前の1801年、イタリア半島中央部に建てられていたトスカーナ大公国 (596頁の注1642参照) を廃し、エトルリア王国を建てると、フランスの傀儡国家としている。1807年、同国を消滅させ、フランスに併合するが、1809年、トスカーナ大公国を復活させ、妹のエリザを女大公に就けた。

また、1802年、イタリア北部にフランスの衛星国¹⁶¹¹を建設し、ナポレオン自らが大統領になる。1805年、オーストリアから半島北西部 (ヴェネト、ゴリツィア) を奪って併合すると、国号を**イタリア王国**に改めた。ジェノヴァはすでに将軍時代に倒しており、リーグレ共和国を建てたが、1805年、フランスに併合した (215頁の注648参照)。

内戦状態にあった**スイス**では、1803年、盟約者団を復活させ、ヘルヴェティア共和国を抱懐に追いやる (458頁参照)。

ポーランド (リトアニア=ポーランド王国、258頁参照) は、フランス革命期の1795年、プロイセン、オーストリア、ロシアによって分割され、消滅していたが (393頁参照)、1806年、ナポレオンはイエナの戦いでプロイセンとザクセンの連合軍を倒し、翌年、プロイセンがポーランドから奪っていた地域に**ワルシャワ大公国**を建設した。なお、その君主となったのはポーランド人ではなく、ドイツ・ザクセン王国の王であった。ザクセンはポーランドと国境を接していたため、関係が深く、1791年、国王のフリードリヒ・アウグストはポーランド議会により次期、ポーランド国王に指名されていた。しかし、彼は、ポーランド分割に巻き込まれるのを避けるため、王冠を辞退している。1795年、ポーランドは彼が危惧していた通り消滅した。ザクセンは1806年の戦いでナポレオン軍に敗れると、フランスと和平を結び、ライン同盟に加わった。また、ナポレオンの計らいにより、公国から王国に昇格した (534頁参照)。

ナポレオンの勢力図は以下の三つに分けることができる¹⁶¹²。

① 直接的に支配した国・地域

本国フランス、オランダ、ベルギー (注1609参照)、ルクセンブルク、イタリア中西部 (教皇領を含む、248頁参照)、バルカン半島北部 (イリュリア州、542頁参照)、スペイン・カタルーニャ (490頁参照)
イタリア王国、ベルク公国やヴェストファーレン王国といったナポレオンが建てた国 (前述参照)

② 同盟関係を結び間接的に支配した地域

ライン同盟に加盟していたドイツ諸邦 (ザクセン、バイエルン、バーデン等)、その他のドイツ諸邦 (ハンブルク、ブレーメン等)、デンマーク、ワルシャワ大公国

¹⁶¹⁰ ナポレオンは自らイタリア王を兼ねる一方、義理の息子ウジェーヌを副王に、実の息子ナポレオン・フランソワ (ナポレオン2世、364頁参照) をローマ王にした。さらに、長兄のジョゼフをナポリ国王とスペイン国王に、2番目の弟ルイをオランダ国王に、末弟ジェロームをドイツ西部のウェストファリア国王に、1番目の妹エリザをトスカーナ女大公に、末妹カロリーヌの夫をベルク大公 (後にナポリ国王) に就けている。

なお、1852年12月、フランス皇帝として即位したナポレオン3世は、2番目の弟ルイの3男である。

¹⁶¹¹ この国は**イタリア共和国**と呼ばれたが (首都はミラノ)、1797年6月にナポレオンが創設したチザルピーナ共和国 (Repubblica Cisalpina) を前身とする。なお、後者は、1796年10月、彼が発足させたチスパダーナ共和国 (Repubblica Cispadana) とトランスパダーナ共和国 (Repubblica Transpadana) が統合され、成立した。

チスパターナ、トランスパダーナ共和国 → チザルピーナ共和国 → イタリア共和国 → イタリア王国

¹⁶¹² Osterhammel, 1800 bis 1850, supra note 1614, p. 16.



1812年のフランスの行政区画

オランダ、ベルギー（注1609参照）、ルクセンブルク、イタリア中西部、バルカン半島北西部はフランスに併合され、同国の州になる。なお、同国に併合されたこれらの地域は、それまでオーストリア＝ハプスブルク家の所領であった。他方、サルデーニャ島とシチリア島はナポレオンの勢力図に入っていないが、これはイギリス軍が駐留し、フランス兵の上陸を防いでいたためである。

◎ 統治

新しい独裁者であるナポレオンは自らが君主となるか、身内を諸国の君主に叙し（前述参照）、統制した。諸国には彼が制定した進歩的な法（ナポレオン法典）やフランス革命の自由・平等の理念、啓蒙思想が持ち込まれ、諸制度が近代的になる。

ドイツでは行政区画が再編成され、諸邦や自由都市の数は半減した。とりわけ、ライン川沿いの聖職領邦は、マインツ大司教領を除き、全て廃止され、プロイセンやバイエルン等に併合された¹⁶¹³。フランスがドイツ地方を支配し、種々の制度を改正（近代化）した1794年から1814年は「フランス人の時代」と呼ばれている。

1806年、ナポレオンはオーストリア、プロイセンをドイツ内で孤立させるため、その他のドイツ諸邦にライン同盟を結成させた。これに伴い、神聖ローマ帝国は解体される。なお、ライン同盟に加盟したドイツ諸邦（バイエルン、ヴュルテンブルク等）はナポレオン軍と共に他のドイツ諸邦（オーストリア、プロイセン）と対戦したため、ドイツは分裂した。

フランスに併合されたルクセンブルクは、それまでドイツ諸邦との関係が強かったが、フランスの影響を強く受けるようになる。同様にフランス領になるベルギーでは、北部のオランダ語圏でもフランス語が使用されるようになったため、この地域の住民の反発を招き、現在まで続く対立の原因を作った（184頁参照）。

¹⁶¹³ ケルン大司教領やトリニア大司教領も廃止されている。

2) ナポレオンの失脚 (1814年4月)

前述したように、ナポレオンはヨーロッパを広い範囲で支配したが、強力な海軍を持っておらず、イギリスを攻略できなかった。この島国を孤立させるため、フランス皇帝は、1806年、**大陸封鎖令**を出し、諸国に守らせたが(462頁の注1347参照)、1810年末、ロシアが離反するようになった。同国を体制に引き戻すため、1812年6月、ナポレオンは大規模な多国籍軍を編成し、遠征に乗り出したが¹⁶¹⁴、成功せず、栄光の座から転落していく。翌年10月、フランスは「諸国民の戦い」(ライプツィヒの戦い)で敗れ、ライン同盟や彼が建設した国々は消滅した。翌4月(1814年)、対仏大同盟はパリを攻略し、ナポレオンを追放するに至った(462頁参照)。

3) ウィーン体制 (1815~1853年)

1814年9月、ナポレオンから解放されたヨーロッパの新しい体制について協議するため、ウィーンで国際会議が始まった。これは30年戦争の講和会議(579頁参照)の後に開かれた会議としては最も規模が大きく、戦争状態が25年も続いた欧州に平和をもたらすことを目的としていた。諸国は和平の重要性をこれまでに強く認識しており¹⁶¹⁵、**ヨーロッパ協調**の精神が育まれた(後述参照)。

出席した諸国の代表は終始、お祭り気分で、討議は進展しなかったが、1815年3月、ナポレオンが流刑地のエルバ島を脱出し、パリに戻ったとの知らせが入ると、危機感を抱くようになり、**ドイツ連邦**(442頁参照)の創設やオランダの復活(470頁参照)等を決め、解散した。特に、オランダ、ベルギー、ルクセンブルク、ポーランド、イタリアの政体は会議に参加した君主・諸侯によって決定されることになった(361頁参照)。なお、フランスは制裁を科されずに済む。

当時の各国君主はフランス革命前の絶対主義の再建を希求し、自由主義やナショナリズム運動を抑制した。フランスでも王政が復活したが、諸国は外交を通じて諸国間の均衡を保ち、約40年間、ヨーロッパに平和をもたらすことに成功する。ウィーン会議の後に構築されたこの国際秩序を**ウィーン体制**と呼ぶが、諸国は和平の重要性を強く認識し、前述したヴェストファーレン体制よりも地域統合を進めた。

◎ 神聖同盟 (1815年~1853年頃)

この体制を維持するため、特別な組織が創設されたわけではないが、当時のヨーロッパ諸国のほとんどはキリスト教を国教とする君主国であり、君主間で**神聖同盟**が結成された。同盟は定期的に会合を開き、ウィーン体制を補完する役割を果たしている。なお、諸国の教派は異なっているが(提唱国のロシアは東方正教会、オーストリアはローマ・カトリック教会、プロイセンはルター派のプロテスタント教会)、宗教活動を目的としていたわけではないため、信条の違いは問題にならず、同盟の結成が可能になった。

神聖同盟とは1815年9月、ロシア皇帝アレクサンドル1世の主導により設けられたキリスト教君主国の連合体である。皇帝は神に選ばれた人物であり、帝位は神聖であるが、ナポレオンに神聖さは無かったとみなした。また、君主制の存続を目指し、自由主義運動を抑えた。原加盟国はロシア、オーストリア、プロイセンの3国であるが、後に多数の君主国が参加した。ただし、イギリスとローマ教皇領は加わっていない。1853年、クリミア戦争が勃発し、ロシアが孤立すると、その機能を失った。

¹⁶¹⁴ **ロシア遠征**(1812年6~12月)はロシアの首都サンクトペテルブルクではなく、モスクワに向けて行われたため、**モスクワ遠征**とも呼ばれる。1713年に首都が移転されるまで、ロシアはモスクワを首都とし(13頁参照)、この都市は「ロシアの心臓」と目されていた。また、ロシア軍はこの第2の首都に結集していたことから、ナポレオンはこの都市に遠征したと考えられる。

しかし、遠征開始から3ヶ月後、ナポレオン軍が入城した際、ロシア軍はすでに避難していた。また、ロシア軍によって火が放たれ、食糧の調達が困難であったため、10月、ナポレオン軍は撤退を余儀なくされた。なお、ロシアには未開拓地が多く、物資を調達できなかったことから、ナポレオン軍は、モスクワに到達するまでに多くの兵を失っていた。撤退に際しては「冬将軍」、つまり、寒波に襲われ、さらに多くの兵士が命を落とすことになる。

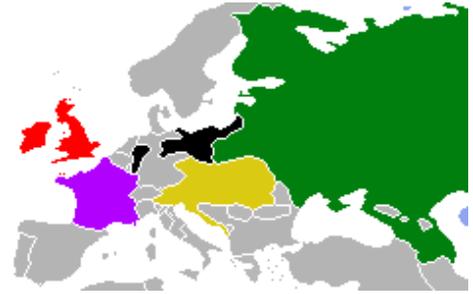
ナポレオン軍には非フランス兵、特に、オーストリア、プロイセン、また、ライン同盟(435頁参照)に参加したドイツ諸邦の兵も参加していた。Jürgen Osterhammel, 1800 bis 1850, Informationen zur politischen Bildung Nr. 315, bpb 2012, pp. 4-29, 16.

¹⁶¹⁵ Osterhammel, 1800 bis 1850, supra note 1346, p. 19.

◎ 四国同盟 (五国同盟)

同年11月には、イギリス、オーストリア、プロイセン、ロシアの間で**四国同盟** (軍事同盟) が発足し、後にフランスも加わり、**五国同盟**¹⁶¹⁶に発展した。その後、これらの国々は列強として国際政治を動かすことになる。

ギリシア語で「ペンタルキー」 (Pentarchie) と呼ばれる5強の中で、当初、最も勢力を付けたのは、ナポレオン軍を撃退し、彼が失脚する機会を作ったロシアであり、皇帝のアレクサンドル1世は神聖同盟を主導した。しかし、1853年、同国が南下政策を強化し、**クリミア戦争** (425頁参照) を引き起こすと、ウィーン体制は崩壊した。戦勝国となったフランスでは**ナポレオン3世**の人気が高まり、フランスは対外的にも大革命が勃発する前の勢力を取り戻していった。



◎ ギリシアとベルギーの独立 (1830年)

なお、ウィーン体制初期の1821年、ギリシアはオスマン帝国からの独立を求め、戦闘を開始した (ギリシア独立戦争、～1828年)。自由主義・民族主義運動を抑圧していた列強は、ギリシアの独立を支持しなかったが、オスマン帝国と衝突していたロシアはギリシアを支援し、その自治権獲得に貢献した。これによってギリシアがロシアの勢力下に入ることを警戒した英仏は、1830年、ギリシアの完全独立を実現させ、自らの陣内に引き込んだ (426頁参照)。

同年、ベルギーも兵を挙げ、オランダからの独立を宣言すると、翌年、列強より承認された (476頁参照)。

◎ 国際機関の設立

国際協調の精神が高まったウィーン会議では**ライン川船舶航行中央委員会**を発足させることも決まった。同委員会は現在でも活動している世界最古の国際機関であり、最初の会合は、1816年、ライン川沿いのドイツの古都マインツで開かれた。なお、18世紀末、この国際河川の航行はフランス革命の自由の理念や、その後の軍事的統合によって自由化され、それまで30以上あった関所は廃止されるようになっていた。これに対し、ドナウ川に関する協力制度の発展は19世紀半ばまで待たなければならなかったが、これはオスマン帝国が流域の大部分を支配していたことによる。

諸国間の協力体制が整う19世紀には以下の国際機関も設立された。

国際電気通信連合 (1865年)、万国郵便連合 (1874年)、列国議会同盟 (1889年)

欧州ドナウ川委員会 (Europäische Donaukommission, EDK 1856～1948年)¹⁶¹⁷

※ドナウ委員会 (Donaukommission 1948年～)

◎ ヨーロッパ協調 (Concert of Europe)

ナポレオンが失脚した1814年から第1次世界大戦が勃発する1914年までの100年間、ヨーロッパ諸国は良好な外交関係を維持し、平和の確立に努めた。その前半は**ウィーン体制**と呼ばれ、諸国はフランス革命前の絶対主義の再建を目指し協力した。フランスでも王政が復活するが、1848年2月、再び革命が起きて王政は倒された。1853年、ロシアが南下政策を進めた結果、**クリミア戦争** (425頁参照) が勃発すると、ウィーン体制は崩壊し、自由主義・民族主義運動が強まった。

こうした中、フランスでは帝政が復活し、ドイツ統一を目指すプロイセンと覇権を争うようになる。その他の国でも帝国主義が強まり、衝突するが、ビスマルクの主導下で関係を改善した。ドイツ宰相の巧みな外交手腕によって築かれた新しい体制、すなわち、**ビスマルク体制**は19世紀前半のウィーン体制とは異なるが (後述参照)、諸国が外交を通し和平の構築を図った点では共通しており、一括して「ヨーロッパ協調」 (Concert of Europe) ないし「列強のヨーロッパ協調」 (Europäisches Konzert der Großmächte) と呼ばれている。

¹⁶¹⁶ 五国同盟は、1820年に発生したスペイン立憲革命 (488頁参照) の対応をめぐってイギリスが同盟国と対立し、実質的に解散した。

¹⁶¹⁷ この国際機関はクリミア戦争の講和条約に基づき設立されている (425頁参照)。

9. 民族主義が台頭する中での諸国の統合

1789年に始まった革命でフランスの王政は倒れたが、ナポレオンの失脚後、復活を果たす。しかし、1848年に再び革命が起き（革命は1830年にも起きている。463頁参照）、王政は最終的に崩壊する。当時、イタリア半島には多数の王国や自由都市が存在し、それらの多くはオーストリア、スペイン、フランス等に占領されていた。つまり、半島は統一されていなかったが、フランス革命の原動力となった自由主義やナポレオン体制下で強まった民族主義は統一運動を刺激することになった。なお、「リソルジメント」と呼ばれるこの運動を主導した**ジュゼッペ・マッツイーニ** (Giuseppe Mazzini) は祖国の統一を目指すだけでなく、ヨーロッパ諸国の統合も提唱している。「神と人民」による祖国統一を実現するため、彼は「青年イタリア」と呼ばれる組織を結成する傍ら、「青年ドイツ」や「青年ポーランド」を立ち上げ、諸国民の結束を図った。

彼の運動に呼応する形で、フランスの作家**ヴィクトル・ユーゴー** (Victor Hugo) は、1850年、「ヨーロッパ合衆国」 (Etats Unis de l'Europe) の創設を提唱した。『レ・ミゼラブル』の作者として知られる彼は全ての大陸諸国がそれぞれの違いや輝かしい個性を失うことなく統合し、国境や関税が存在しない全ての民族の祖国になる日がやって来るであろうと述べている¹⁶¹⁸。

しかし、彼らの活動は実を結ばず、イタリアとドイツでは国民国家を建設する運動が強まった。1866年、哲学者のフリードリヒ・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) は著書『善悪の彼岸』の中で、そのような動きを批判する一方、愛国主義を克服し、理性を取り戻せる能力を善良なヨーロッパの姿として捉えている¹⁶¹⁹。

なお、イタリアやドイツのように祖国統一を達成することは地域統合にあたらぬ。この時代に高まった民族主義（民族の芽生え）は、第1次世界大戦後、ユーゴスラビアとチェコスロバキアを成立させるが、何れも冷戦終結後、崩壊した。

10. ビスマルク体制

1867年、ルクセンブルクの領有をめぐり、フランスとプロイセンの関係が悪化すると（480頁参照）、ヨーロッパ諸国の文化人や平和主義者は平和を求め、平和自由連盟 (Ligue de la paix et de la liberté) を結成した。ユーゴーもそれに参加し、戦争の回避に貢献しているが、フランスとプロイセンの対立は解消されなかった。1870年7月のエムス電報事件を機にフランスが宣戦布告し、**普仏戦争（独仏戦争、372頁参照）**が勃発した。

ドイツ諸邦は数ヶ月の内に勝利を確実にし、翌年（1871年）1月、フランスのヴェルサイユ宮殿でドイツ帝国の創設（初代皇帝の即位）を宣言した（372頁参照）。また、敗戦国からアルザス・ロレーヌ地方（594頁参照）を奪い、その後、約75年も続く独仏対立の原因を作った。

戦後、ドイツはフランスの復讐に備え、オーストリア、ロシアと**三帝同盟**を結成したが、バルカン半島の分割をめぐり、オーストリアとロシアが対立するようになる。イギリスもロシアの南下を警戒したため、1878年、ドイツの**ビスマルク宰相**（447頁参照）はベルリンで国際会議を開き、列強の仲介役を務めた。会議の結果、ロシアはバルカン半島における覇権を制限されることになる（427頁参照）。これを不服とし、ロシアが三帝同盟から脱退すると、同国がフランスに接近することを防ぐため、ビスマルクは1887年、ロシアと再保障条約¹⁶²⁰を締結した。その一方で、ロシアがイスタンブールに攻め入ったときに備え、オーストリア、イギリス、イタリアに軍事協定を結ばせた（1887年の地中海協定）。

このようにして構築されたヨーロッパの国際秩序を**ビスマルク体制**と呼ぶ。19世紀最後の四半世紀、欧州では帝国主義が隆盛し、列強は衝突を繰り返すが、「誠実な仲介人」を自称するドイツ宰相の巧みな外交手腕によって均衡を維持し、大きな戦争を回避することができた（372頁参照）。

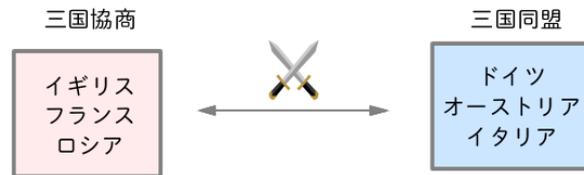
¹⁶¹⁸ See Denis de Rougemont, *Vingt-huit siècles d'Europe*, Payot 1961, pp. 255-256.

¹⁶¹⁹ Friedrich Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse*, 1886, para. 241.

¹⁶²⁰ これはドイツがフランスと交戦するとき、ロシアは中立をとり、ロシアがオーストリアと交戦するときにはドイツが中立をとることを取り決めた条約である。

11. 第1次世界大戦とヴェルサイユ体制

前述したように、ビスマルクはロシアがフランスに接近することを恐れ、独露再保障条約を成立させたが、1890年、世代交代が進んだドイツでビスマルクが辞任に追い込まれ、同条約が更新されなくなると、ロシアはフランスに接近した。また、1904年に英仏協商が、1907年に英露協商が発足することによって**三国協商**が成立する。こうして三国協商と三国同盟が対立する構図が出現した（382頁参照）。



当初、両陣営は互いに牽制し合うことで戦争を回避していたが、バルカン半島の分割をめぐるオーストリア（厳密には、オーストリア＝ハンガリー帝国）とロシアの対立が激しくなると均衡が崩れ、1914年7月、第1次世界大戦が勃発した（381頁参照）。

開戦当初、イタリアは三国同盟の取り決めに従い、中立を守っていた。しかし、同盟国であるオーストリアから「未回収のイタリア」（38頁参照）を奪う好機と捉えると、1915年5月、三国協商側に回り参戦した。さらに、1917年4月、米国が協商側に加わると、同陣営は圧倒的に有利になり、勝利を収めた。

1919年6月、戦勝国となったフランスは普仏戦争の恨みをはらすべく、およそ半世紀前に初代ドイツ皇帝の戴冠式が行われたヴェルサイユ宮殿に敗者を呼び出し、講和条約（ヴェルサイユ条約）に署名させた。この条約によってフランスはアルザス・ロレーヌ地方を奪還した。また、当時の主要産業である石炭・鉄鋼業が盛んなザールラントを占領したが（590頁以下参照）、これは独仏対立の新たな要因となる。

なお、ヴェルサイユ条約に基づき、ドイツは巨額の賠償金の支払いを義務づけられた。その履行ができなくなると、1923年1月、フランスとベルギーは出兵してルール地方を占領し、この工業地帯から賠償金を回収しようとした（385頁参照）。両国軍の駐留は、翌年10月、米国の仲介によって紛争が解決するまで続いたが、撤退すると、ヨーロッパは和平の空気に満たされていく。1925年、独仏の和解に貢献したフランスのブリアン首相とドイツのシュトレゼマン外相にはノーベル平和賞が贈られている。

1929年、ブリアンは「ヨーロッパ連邦」の創設を提唱し、地理的一体性を持つ諸国が経済統合（共同市場の創設）に取り組むことや、ロカルノ条約（385頁参照）が定める集団的安全保障体制を拡張する必要性を説いた。しかし、同年に発生した大恐慌は各国の経済に大きな打撃を与え、欧州統合の芽は摘み取られた。

第1次世界大戦後の国際秩序を**ヴェルサイユ体制**と呼ぶが、同体制下で帝国主義時代の君主同盟は破棄された。ナポレオン戦争後のウィーン体制とは異なり、戦勝国（連合軍）は**国際連盟**という現代的な国際機関を創設し、集団安全保障体制を構築しようとしたが、提唱国であり、世界最大の影響力を持っていた米国が参加しなかったため、実効性に欠けた。この機関に加盟した国のほとんどはヨーロッパ諸国で、実質的に欧州の国際機関であったが、次の段落で述べるように、ヨーロッパ独自の統合構想も主張された。

12. 戦間期

欧州が主たる戦場となった第1次世界大戦は地域統合を活性化させる契機となる。前述したように、ブリアンは「ヨーロッパ連邦」の創設を訴えた。また、オーストリアのクーデンホーフ・カレルギー（Coudenhove-Kalergi 1894～1972）伯は、大戦で荒廃した欧州が復興し、米ソ両大国に対抗しうる力を付けるには、ポーランドからポルトガルに至る諸国が政治・経済的同盟（汎欧州同盟）を結成する必要があると述べた。そして、1922年には**汎ヨーロッパ・ユニオン**（Paneuropa-Union）¹⁶²¹を創設し、総裁に就任する。彼の構想は1920年代に多くの賛同者を集めたが、1930年代に入ると国家主義が台頭し、鎮圧された。なお、カレルギーは日本人の母とオーストリア人の父親の長子として東京で生まれている。

戦間期、ヨーロッパでは共産主義運動が勢いを増した。労働者や農民が蜂起すると、それを取り締まるファシストが現れ、政治運動に発展する（387頁参照）。1929年10月、ニューヨーク株式市場の株価大暴落をきっかけとし、**大恐慌**の

¹⁶²¹ 汎ヨーロッパ・ユニオンは現在でも存在し、約30のヨーロッパ諸国が加盟している。

波が世界各地を襲うと、物価高騰や失業者の大幅増といった不安定な状況が生じ、ファシズムを勢い付けさせることになった(387頁参照)。

このような状況下、ドイツでは1933年1月、ヒトラーが首相の座に就く。また、1935年1月、ザールラントは住民投票を実施し、ドイツ復帰を決めた(590頁参照)。さらに、1938年3月、ドイツがオーストリアを併合すると、ヴェルサイユ体制は崩壊した(388頁参照)。

13. 第2次世界大戦

第1次世界大戦の講和条約に従い、ドイツはポーランドに領土を割譲したが(384頁参照)、ヒトラーはその奪還を狙うようになり、1938年8月、ソ連と相互不可侵条約を結んで、この大国から攻められないようにすると、翌月、ポーランドに侵攻し、第2次世界大戦を引き起こした。開戦当初、独軍はポーランド西部、デンマーク、ベネルクス3国、フランスを含む近隣諸国を制圧し、優勢を保った(390頁参照)。なお、ドイツは占領する広い地域で経済圏を創設する計画を立てており、その前提として通貨の統合を検討していたが、いずれも実現していない¹⁶²²。

1941年6月、かねてから共産主義の撲滅を計画していたヒトラーは独ソ不可侵条約を一方的に破棄し、各地から一斉に侵攻した。「バルバロッサ作戦」¹⁶²³と名付けられた奇襲攻撃に成功したドイツ軍はモスクワ攻略を視野に入れるが、1943年2月、スターリングラードの戦いで敗れたのを機に劣勢に回り、1945年4月下旬には、赤軍に首都ベルリンを包囲された。5月7日、ドイツが降伏すると、翌日、ヨーロッパにおける世界大戦は終結する。なお、戦勝国となったフランスは、石炭・鉄鋼業が盛んであったザールラントを再び支配下に置いた(590頁以下参照)。

終戦は「欧州の時代」に終わりを告げるものでもあり、米ソの覇権がますます強まった。両大国の狭間においてヨーロッパは東西に分断される。つまり、ソ連が統制する「東側」の共産主義圏と米国が主導する「西側」の資本主義圏に分かれるが、それぞれの陣営内で諸国の統合が進められた(396頁以下参照)。

※ 東ヨーロッパ諸国の統合や東西対立について、395頁を参照されたい。

また、第2次世界大戦後の欧州統合(EU統合)について、606頁以下を参照されたい。

¹⁶²² Thomas Sandkühler, Europa und der Nationalsozialismus, Ideologie, Währungspolitik, Massengewalt, in <https://zeithistorische-forschungen.de/3-2012/4673>

¹⁶²³ 「バルバロッサ」(Barbarossa)とは、12世紀後半、神聖ローマ帝国を立て直した皇帝(ドイツ王)で、英雄視されているフリードリヒ1世の愛称である。なお、彼は「赤髭王」とも呼ばれた(419頁参照)。



この資料は入稻福智著『地域研究ヨーロッパ～欧州の本質～』からの抜粋です。

全編（PDF A4 約 700 枚）は下の URL よりダウンロードすることができます。

ファイルのサイズは約 70MB と容量が大きいため注してください。

<https://eu-info.jp/europe2025.pdf>

